

富山市埋蔵文化財調査報告 51

富山市内遺跡発掘調査概要VII

2012

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財発掘調査概要VII 正誤表

ページ	行	誤	正
2	例言 5	理化学的分析	自然科学分析
23	写真18	(遺物番号)20 (遺物番号)21 (遺物番号)22 (遺物番号)23	(遺物番号)37 (遺物番号)38 (遺物番号)39 (遺物番号)40

富山市内遺跡発掘調査概要VII

2012

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが平成 13 年度から平成 22 年度において実施した埋蔵文化財発掘調査等のうち、小規模発掘調査及び測量等調査の報告書である。
- 2 本書には、金草電化農場前遺跡、呉羽富田町遺跡、茶屋町東遺跡の調査成果を掲載した。
- 3 現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

亀田正夫、小島俊彰、佐伯哲也、坂森幹浩、西井龍儀、福江 充、藤田富士夫、鹿島昌也、
堀内大介、富山市郷土博物館（順不同、敬称略）
- 4 本文中記載の肩書等は調査当時のものである。
- 5 理化学的分析は、金草電化農場前遺跡において放射性炭素年代測定・炭化材樹種同定を行い、その結果を本書に掲載した。
- 6 出上品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 7 本書の挿図・写真的表示は次のとおりである。
 - (1)方位は真北、水平水準は海拔高である。
 - (2)測量基準は任意座標を設定して行った。
 - (3)遺構表記は、掘立柱建物：S B、土坑：S K、十師器焼成遺構：S X、ピット：P を用いた。
- 8 本書の執筆は、埋蔵文化財センター職員の協力を得て、IVを野垣好史（埋蔵文化財センター主任学芸員）、その他を古川知明（埋蔵文化財センター所長）が行い、各々の責を文末に記した。

目　　次

例言

I 金草電化農場前遺跡	3
II 呉羽富田町遺跡	24
III 茶屋町東遺跡（測量調査）	36
IV 茶屋町東遺跡の南方から採集された須恵器	51
報告書抄録	54

I 金草電化農場前遺跡

1 調査の経緯

金草電化農場前遺跡（富山市遺跡番号 201333）は、昭和 51 年 3 月発行『富山市遺跡地図』に No.77 「金草電化農場前遺跡」として登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地となった。須恵器の包含地である。平成 5 年 3 月の改訂版では No.333 と改定し、面積は 20,000 m²とした。分布調査では須恵器・土師器・鉄滓が採集されたため、奈良・平安時代の散在地とした。

平成 14 年 3 月、富山市住吉 1009-6 番地において個人住宅建設の事前協議がなされた。開発予定期は周知の埋蔵文化財包蔵地「金草電化農場前遺跡」の東端部に該当するため、3 月 11 日に試掘確認調査を行った。その結果、表土直下の浅い位置において土坑等の遺構が少數確認されたため、引き続き検出された遺構の発掘調査を行って 3 月 12 日に記録保存措置を完了した。調査面積は 145 m²である。遺構内からは木炭が出土したため、その樹種鑑定及び放射性炭素年代測定を実施した。現地発掘作業については、国庫補助事業とした。

調査および整理担当者は、古川知明主任学芸員である。

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

金草電化農場前遺跡は、呉羽丘陵の西側緩斜面に立地する。標高は 30m である。

呉羽丘陵は、その東側麓に「呉羽山断層」と呼ばれる断層が存在し、山頂の東側斜面は急傾斜、西側斜面は緩傾斜地形となっている。この緩傾斜地には、小さな開析谷が無数に入り込み、多くの馬背状丘陵地形を発達させている。各時代の遺跡は、このような丘陵地形の特性を利用して構築されている。

金草電化農場前遺跡は、このような緩斜面地形のうち、ちょうど中位にあたる高さに立地しており、比較的傾斜の小さな平坦地上に存在している。遺跡の北側から東側にかけては、幅の狭い谷が存在し、水流が認められる。この谷川は、傾斜地麓の「境野新扇状地」と呼ばれる旧扇状地形に由来する平坦地を北流していく。〔西井・藤田 1976〕

遺跡地は、表層が腐植土、いわゆる黒ボクであり、粘質を持つ。その下の地山土は粘質の黄色火山灰層で、再堆積層とみられる。

(2) 歴史的環境

呉羽丘陵西側緩斜面地には、その地形の特性を利用して、旧石器時代から近世まで各時代の遺跡が営まれている。その数も多く、この一帯は富山市でもっとも遺跡密度の高い地域のひとつといえる。

周辺 2km 圏内における旧石器時代の遺跡は、西側緩斜面に散見される。これらに共通した特徴は、



図 1 金草電化農場前遺跡位置図(1:50,000)



図 2 金草電化農場前遺跡と周辺の遺跡(1:10,000)

(番号は市遺跡番号 201 以下の下 3 衔番号)

完形の石器が単独あるいは少量出土することであり、短期間の行動の痕跡と評価している〔西井・藤田 1976〕。近接して二番金草遺跡がある。

縄文時代においては、中期以降の遺跡が認められる。同じ緩斜面であるが金草電化農場前遺跡よりやや高い位置の小平坦面を利用して営まれる金草 B 遺跡(337)・吉作南 II 遺跡(336)のほか、境野新扇状地の平坦面に立地する住吉 III 遺跡(314)などがある。

弥生時代後期から古墳時代初期にかけては、やや南に離れた丘陵上に吳羽山丘陵古墳群が営まれるが、この周辺では墳墓・古墳は見られない。このころ遺跡南東方向の丘陵最高峰城山（標高 145m）の山頂には、弥生後期の高地性集落が営まれた。ここはその後中世に至り、白鳥城跡がこの高地性集落と重なって築かれたもので、城跡の発掘調査に伴い良好な空堀跡等の遺構が確認された〔富山市教委 1983〕。麻柄一志氏は同様な高地性集落が、新潟から福井にかけて広範囲に点在する状況を明らかにし、これまで述べられていたような畿内からの一元的な軍事的圧力だけでは理解が難しいとした〔麻柄 1998〕。

白鳳時代には、県史跡・金草 1 号古窯跡（318）が構築され、須恵器生産が行われた。この窯は 7 世紀後半に操業されたもので、昭和 45 年富山市教育委員会による発掘調査で、半地下式登窯本体と灰原が確認され、大量の須恵器が出土した〔富山市教委 1970〕。出土品のうち須恵器杯蓋の 1 点にはヘラ書きで「有大人口口（以下判読不明）」と刻まれたものが出土した〔藤田 1983〕。本窯の北側平垣地に広がる住吉新堤南遺跡（317）は、この窯に関連した T 房・住居等の集落跡と推定される。またこの時期の単独窯として近くに吉作 2 号窯の存在が指摘されている〔藤田 1983〕。金草 1 号古窯跡周辺における須恵器生産は、南方 600m にある 6 世紀のセンガリ山窯跡を初現とし、8 世紀末頃まで継続した。この吳羽丘陵西側一帯は一大窯業生産地帯としての位置づけがなされた〔藤田 1983〕。

古代道路跡と推定される直線道路遺構が、金草電化農場前遺跡と重なって直上を走っている。この道路跡は京田良志氏らが航空写真上で発見したもので、200 年現地測量調査が行われ、その存在が現認された〔西井・小林 2005〕。「吳羽山古道」（613）として埋蔵文化財包蔵地とした。

中世には城山山頂に白鳥城跡が築城された。記録によれば平安末の源平合戦時、源氏勢が「御服山」に陣を張ったという〔富山市教委 1981〕。調査ではこれを裏付ける遺構遺物は検出されていない。富山市教育委員会による 3 次にわたる試掘調査の結果、主郭から廻廊に付随する石組溝や鍛冶遺構、周辺から階段のある空堀跡等、16 世紀代の遺構が検出された〔富山市教委 1981・1983・1984〕。これらは主に天正 13（1585）年豊臣秀吉が家臣である富山城主佐々成政攻めを行なう際拠点とした時期の遺構と推定したものである。空堀跡においては数回にわたる改修痕が確認されており、それ以前に居城したと記録に見える神保氏時代の遺構を含む可能性がある。

3 調査の成果

約 20cm の表土（畑耕作土）及び部分的に残存する遺物包含層（黒色腐植土）の直下において遺構を確認した。

(1) 遺構 縄文時代の小穴 1 基、奈良時代の土師器焼成土坑 1 基、十坑 3 基を検出した。

小穴 調査区の中央南端で、十師器焼成坑 SX02 の床面下において検出した。平面楕円形で、長径 35cm、短径 30cm、深さ 34cm である。褐色土の单層である。縄文土器碎片が出土した。

土師器焼成坑 SX02（図 5） 調査区の中央南端で検出した。楕円形状の平面形で、長径 3.0m、短径 2.25m で、東西に長い。南辺壁面の上部の一部は木柵である。深さは 10cm で、底面はほぼ平らであるが若干の凹凸がみられる。壁面は緩やかに立ち上がる。

底面のほぼ中央部、及び東辺壁の立ち上がり部分において、6 箇所に分散した焼土のブロックや木炭の集中したブロック 1 箇所を検出した。焼土ブロックは厚さ数 cm で、床面から 1.2cm 浮いていた。東端のブロックは黒化しており、底面が黒く硬化していた。木炭集中ブロックでは 3 本の木炭の形状が確認できた。ブロックはちょうど壁が屈曲する部分にあり、それぞれの壁際に沿って 1 本ずつ 20cm 程度の材が置かれ、その間に不定形の材が斜めに掛け渡すようになっていた。この 3 本の木炭に

について材同定を行った結果、クリ・エゴノキ属が確認できた。燃料材とみられる。

壁に沿って土坑の内部で4基の小穴が確認できるが、うち1基は縄文時代の小穴で、それ以外は後世の擾乱である。

遺物は、30点の遺物が出土しており、うち16点が須恵器である。この他、焼成粘土塊1点、焼損した礫片も多く出土した。分布はまばらであり、集中して出土するものではなく、すべて破片である。概して遺構の中央から西部にかけて多い。床面から数cm浮いて出土した。須恵器には杯蓋・杯身・甕・横瓶がある。杯蓋の中には内面酸化のものがある。土師器には、碗・甕・長胴甕である。遺構内からは縄文土器2片・白鳳時代の須恵器1点が出土したが、混入とみられる。

以上の遺構形態からみて、この遺構は土師器焼成遺構と考えられる。この遺構の分析については総括で行う。

土坑 SX01 調査区の南東部において一部を検出した。隅丸方形の平面形で、東西1.2m南北2.2mを検出した。深さは15cmで、内側が5cm程度浅いため、壁直下を浅い溝が廻るように見える。後述するSX03同様、竪穴建物の一部である可能性がある。遺構内からは須恵器・土師器片が出土した。

土坑 SX03(図6) 調査区の東部で一部を検出した。隅丸形状で、東西6.5m南北2mを検出した。東端はSX02調査区の南側に延びている。北側は土師器焼成坑SX02と重複し、検出状況からみてSX03が古い。壁面の立ち上がりは隅角周辺が緩やかで、北側は直立する。SX01同様、壁直下に浅い溝状の落ち込みがあり、深さは10cmである。落ち込みの南側の部分はやや高く深さ4~6cmである。遺構内からは須恵器杯蓋・焼損した礫片が3点出土した。SX01同様隅丸方形の竪穴建物の北西隅角部に該当し、南側の高台部は貼床部分の可能性がある。

隅角から60cm北側の壁面直下には、径15cmの小ピットp3がある。内部から須恵器甕が出土した。SX03に伴うかどうか不明であるが、ここでは伴うものと考えておく。

土坑 SX04 調査区の東部で土師器焼成坑SX02と重複して検出した。検出状況からみてSX04が古い。平面形は楕円形状で、西側が切れる。東西1.4m南北1.2m、深さは約10cmで、中央は浅い。遺構内からは須恵器杯1点が出土した。

土坑 SK01(図7) 調査区の東部で検出した。楕円形平面で、断面は楕状である。長径1.2m、短径0.95m、深さ0.3mである。土層は、基底部に自然堆積の腐植土由来の土が堆積し、その上に人為的な土を乗せ整形しているとみられる。その上に堆積し穴を埋める土は、すべて焼土が含まれており、またその最下層には木炭が含まれる。壁面は焼けていないことから、焼上を廃棄したものと考えられる。遺構内からは須恵器(杯蓋・杯身・甕)・土師器(甕)が出土しており、奈良時代とみられる。したがって遺構の構築年代も奈良時代と推定しておく。

(2) 遺物(図8~12・写真17・18)

縄文土器(1,2)

2点出土した。1はヘラ描きによる沈線の綾杉文である。縄文中期後葉か。2は単節縄文RLを左上から右下方向に回転させて施文した。時期不明。いずれも土師器焼成坑SX02出土であるが、混入と考えられる。

白鳳時代の須恵器

3は杯蓋である。口径23cmと大型である。内側に返しがある。SX03出土。

45は杯蓋である。径16cm前後に復元できる。外面頂部平坦面はケズリ整形である。端部外側はくぼませている。遺物包含層出土。

4は高台のある杯身である。高台径12cmで、幅広で外側へふんばる形態である。SX02出土。

奈良・平安時代

①須恵器

杯蓋 18~20は端部が折れ曲がるものである。18は径16.5cm、20は径16cmで、端部を上に盛り上げて端を折る。8世紀後半頃のもの。19は径20.5cmと大形で、端部は三角形に尖る。7世紀末~8世紀初頭に遡る可能性がある。SX02出土。37は端部を三角形に尖らせるが、全体が厚く、シャープ

さに欠ける。SK01 出土。41 はつまみ部で、平たいボタン形で中央の突起先端は摩滅している。42 は器厚が厚く、端部は三角形で低い。43 は端部を丸める。44 は軽く外反させる。41~44 は遺物包含層出土。8 世紀後半頃のもの。44 は 7 世紀末~8 世紀初頭に遡る可能性がある。

杯身 21~22 は体部片である。直径 11~13cm である。23~24 は高台付の底部である。23 の高台の整形はシャープで、8 世紀後半頃のもの。24 は器壁が薄く、高台の高さも低い。23 より後出のものであろう。21~24 は SX02 出土。36 は二次被熱し灰赤色化した杯身である。無台で、底面中央をケズリにより整形する。SX04 出土。38 は無台の底部で、底は厚い。体部はまっすぐ立ち上がる。SK01 出土。46 は、内外面とも自然釉がかかり、底径 7cm と小形である。体部は高台端から緩やかに直立する。8 世紀後半から 9 世紀前半のものとみられる。47~49 はシャープな高台をもち、体部は高台より外側から立ち上がる。8 世紀後半頃とみられる。46~49 は遺物包含層出土。

壺 13 は体部で、外面平行タタキ内面同心円圧痕を残す。SX03 に付属するとみられる p3 出土。25~26 は体部で、外面平行タタキ内面同心円圧痕を残す。器壁は 6mm 程度で薄い。27 は頸部から体部にかけての部分で、器壁は肥厚する。外面平行タタキ内面同心円圧痕を残す。25~27 は SX02 出土。40 は体部下半で、全体が酸化焼成である。外面平行タタキ内面同心円圧痕を残す。SK01 出土。50~52 は外面平行タタキ内面同心円圧痕を残す。50 は 25~26 同様器厚 6mm と薄く、51~52 は 9mm 厚でやや厚い。50~52 は遺物包含層出土。

壺 53 は壺底部とみられる。高台が付く。外面は自然釉がかかり、釉ダレがみられる。遺物包含層出土。

横瓶 28 は外面平行タタキとカキメ、内面同心円圧痕を残す。閉寒円板の接着痕部分で剥離している。SX02 出土。54 は閉塞円板である。平面円形で厚さ 1.1cm。外面は平行タタキ痕の上にヘラ描きで V 字を描き、一方の辺は長い。内面は指頭正痕が著しい。周囲の断面は接合帶で剥離した様相を呈する。55 は横瓶側面である。外面には平行タタキ痕が薄く残り、一部に自然釉がかかる。側端に直径 9.4cm の無釉部分があり、内部は離れ砂の融着がみられる。この痕跡は胴側面置台（窓道具）の離れた跡と理解され、この横瓶が横立て焼かれたことを示している。54~55 は遺物包含層出土。

陶製円板 29 は瓶体部破片を橢円形円板状に加工したものである。長径 5cm 短径 3.5cm 厚 1.3cm。SK01 川土。

②土師器

中形壺 30,31 は体部下半で、内外面縦方向のハケメ調整である。34 は外面横方向の粗いハケメ、内面斜め方向のハケメ後部分的なヨコナデを行う。いずれも SX02 出土。

長胴壺 5 は頸部から体部上半である。内外面ヨコナデである。6~9 は体部破片である。6,7,9 は内外面とのハケメ、9 は外面縦方向のケズリ、内面ハケメである。10 は底部で、外面縦方向のケズリである。5~10 は SX02 川土。14 は口唇部を面取りし、口縁外側を二段にする。15 はくの字口綴である。14~15 は不明ピット出土。32 は体部下半で、外面縦方向のケズリ、内面ヨコナデである。SX02 出土。56 は口縫端部を面取し、上端を上につまみ上げる。復元径は 40cm で長胴壺とである。8 世紀末から 9 世紀初頭とみられる。遺物包含層出土。

鍋 12 は体部破片で、外面横方向のハケメ、内面カキメである。SX02 山土。33 は体部で、外面は平行叩き後横方向ハケメ後縦方向のケズリ、内面縦横のハケメを行う。35 は体部下半で、外面横・斜め方向のケズリ、内面斜め方向のハケメである。とともに SX02 出土。

土製円板 39 は円形の切り取った痕跡をもつ土製品で、酸化焼成されている。径約 8.5cm で、瓶蓋類製作時における頸部切取円板と推定される。大きさからみて横瓶もしくは人型提瓶の頸部であるが、出土器種からみて前者の可能性が高い。表面平行タタキ、裏面同心円圧痕を残す。中央には表面側から行った貫通穴がある。縦 2cm 幅 4mm の剣断面形で、ヘラ状工具による刺突による。円板周囲は指頭で押さえたりナデを行って整形している部分があることから、廃棄せずに何らかの使用目的をもって焼成し、二次利用を意図したとみられる。同様な頸部切取円板は、小松市二ッ梨一貫山窯跡〔小松市教委 2002〕で類例がある。SK01 川土。

焼成粘土塊 11 は 4cm×3cm 大の粘土塊で、スサを混入した痕跡を残す。黄灰色～暗灰色の酸化焼成品である。重量 12 g。SX02 出土。

4 自然科学分析

金草電化農場前遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

金草電化農場前遺跡は、神通川左岸の呉羽丘陵に位置する。発掘調査により、古墳時代以降の土坑等が検出されている。このうち、土坑 SX02 では、須恵器の他に焼土や炭化材が出土しており、土坑内での火の使用がうかがえる。

本報告では、SX02 から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行って遺構の構築・使用時期を推定すると共に、樹種同定を併せて行い、木材利用に関する資料を得る。なお、炭化材は小片のため、年代測定は少量でも測定可能な加速器質量分析法（AMS 法）で行う。

(1) 試料

試料は、SX02 から出土した炭化材 3 点（木炭 1～3）である。樹種同定は全点について行い、年代測定は木炭 2 を選択した。

(2) 方法

① 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所（IAA）の協力を得た。

② 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

③ 結果

放射性炭素年代測定および層年較正結果を表 1 に示す。出土炭化材（SX02 木炭 2）の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は 1260±30yrBP、較正層年代（測定誤差 σ ）は calAD 691–calAD 774 である。また、炭化材 3 点の樹種は、いずれも落葉広葉樹で、2 種類（クリ・エゴノキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

縫孔材で、孔隙部は 1～4 列、孔隙外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～15 細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では棱凹形、單独または 2～4 個が複合して、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性 II 型、1～3 細胞幅、1～20 細胞高。

(4) 考察

① 土坑の年代

出土した炭化材の年代値は、1280BP（補正年代 1260BP）であった。この年代値を INTCAL98 [Stuiver et al. 1998] の較正曲線に当てはめると、7 世紀末～8 世紀後半頃となる。類似する年代値は、開ヶ丘中山 IV 遺跡の SX01 や開ヶ丘中山 V 遺跡の 1 号窯等でも報告されている〔富山市教委 2002 d〕。ここで、今回の炭化材はエゴノキ属で、百年を超えるような大木は少ない。樹木が大木である場合、樹齢による誤差〔東村 1990〕すなわち試料の年代値（木材組織が形成した時期）と木材が伐採燃焼された年代との間の差が生じる場合があるが、今回は考えにくい。これらのことから、遺構の構築・使用時期としては、7 世紀末～8 世紀後半頃の年代が推定される。上坑内からは須恵器も出土してい

ることから、今後須恵器の型式から推定される年代観との比較検討も行いたい。

②木材利用について

炭化材は、土坑内から焼土と共に検出されていることから、燃料材に由来する可能性がある。樹種は、2点がクリ、1点がエゴノキ属であった。このうち、クリを利用する結果は、境野新南遺跡や開

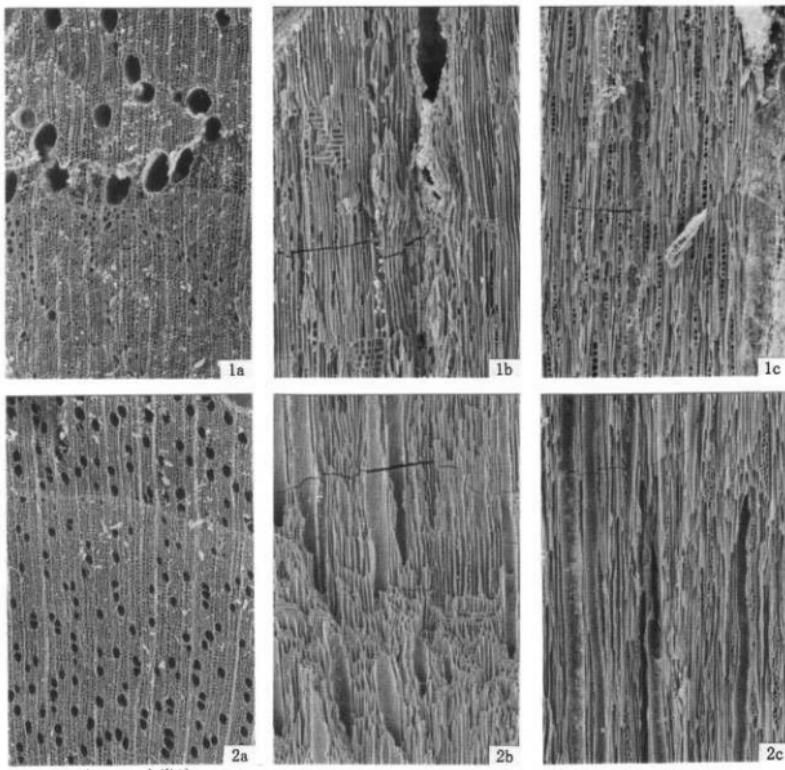
表1. 放射性炭素年代測定および曆年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (曆年較正 用) (yrBP)	曆年較正年代 (cal)						相対 比	測定機関 Code No.
SX02 木炭 2 炭化材(エゴノキ 属)	1260±30	-26.89± 0.91	1260±26	σ	cal AD 691	-	cal AD 750	0.847			IAAA-109 38
				cal AD 762	-	cal AD 774	0.153				
				cal AD 670	-	cal AD 783	0.925				
				2 σ	cal AD 788	-	cal AD 815	0.055			
					cal AD 843	-	cal AD 858	0.020			

1) 年代測定は、加速器質量分析法(AMS法)による。

2) 年代は1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}\text{C}$ の値を基に同位体校正を行った値を示す。

3) 曆年較正にはCALIB REV 6.0.0(較正曲線データ: IntCal09)を使用した。



1. クリ (SX02 木炭1)
2. エゴノキ属 (SX02 木炭2)
a: 木口, b: 柄目, c: 板目

図版1 炭化材

— 200 μm :a
— 200 μm :b, c

ヶ丘中山遺跡等で検出されている焼壁土坑から出土した炭化材の樹種同定結果とも一致する。本遺跡でも、これらの焼壁土坑と同様の木材利用が推定されるが、点数が少ないと詳細は不明である。

クリとエゴノキ属は、いずれも集落周辺にみられる二次林（雜木林）の構成種として普通に見られる種類である。このような雜木林は、現在の奥羽丘陵にも残存しており〔宮脇 1985〕、木材を周辺から得ていたことが推定される。

5 総括

(1) 遺跡の性格

金草竈化農場遺跡は、これまで奈良～平安時代の遺跡として周知されていたが、今回の調査により新たに縄文時代・白鳳時代が追加された。調査ではその時期の明確な遺構は検出されなかつたが、近隣に遺構が存在するものと思われる。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡の東側斜面上部に金草B遺跡・吉作南II遺跡があり、いずれも本遺跡出土の縄文中期と推定される時期と同じであり、何らかの関連があるとみられる。いずれの遺跡においても出土・採集量は少ないことから、中核的な集落形成ではなく、小規模な住居構築あるいはキャンプ的な居住を行った遺跡と推定される。

白鳳時代の遺物は、7世紀末から8世紀初頭のものであり、南東側に隣接する金草第一古窯跡〔富山市教委 1970〕の年代と一致する。金草第一古窯跡の窯体及び灰原から出土した杯蓋をみると、内面に小さな返しがあるものと無いものが混在しており、ちょうど返しが消失し、奈良期以降に一般化するくの字形の端部への移行期のものといえる。出土した杯蓋の特徴は金草第一古窯跡の消失前の返しの特徴と一致している。胎土分析は行っていないが、近接することから考えて、本遺跡出土の須恵器は金草第一古窯跡から供給されたと考えてよいであろう。

奈良・平安時代については、土師器焼成遺構・竪穴建物と推定される浅い十坑2基が検出され、これらは時期差を認めることができる。遺構の切り合ひ関係からみて、竪穴建物?から土師器焼成遺構へと移行しており、集落（一般住居）から土師器生産（工房）への変化と理解できる。その変化の時期は8世紀後半から末頃とみられる。

なお、今回調査地は、古代と推定されている奥羽山古道の範囲内に含まれると推定できるが、道路に開通する遺構は確認できなかった。

(2) 土師器焼成坑について

土坑SX02は上師器焼成坑としての性格を推定できる。

地山を浅く掘り込み、底面周囲の一部に焼けて硬化した部分が存在し、その焼成に関わるとみられる木炭が残存していたことから、この土坑は何らかの焼成坑であると理解される。古代における焼成坑には、木炭生産の機能が推定されている焼壁土坑と、土師器を焼成した上師器焼成坑がある。前者は形態・深さは様々であるが、壁面が焼けていること、面積に比して深さが深いことが特徴として挙げられる。一方上師器焼成坑は、壁面もしくは底面が焼け、面積が広く、面積に比して深さが浅いことが特徴であり、焼成後の被破品が遺存される例も多く見られるといった相違が認められる。

土師器焼成坑の集成分類を行なった望月精司氏によれば、本例における形態が不整椭円形であること、壁面・底面の被熱が弱いことの2点の特徴から、△類不整形タイプとする分類に含まれる〔望月 1997〕。

土坑内に残存していた土器類は散漫な分布を示し、失敗品が残されたといった状態ではない。また、出土した30点の半数以上が須恵器であることから、土坑内の土器は、焼成後、廃棄十坑として再利用された際に投棄されたものと考えることができる。一方焼土及び木炭は、底面被熱部分直上に存在することから、上師器焼成完了時において残存した状態での遺存物と理解される。この木炭の放射性炭素年代測定の結果ではその年代は7世紀末から8世紀後半頃である。したがってこの上師器焼成坑SX02の操業年代は、土坑内に残存していた須恵器・土師器の上限年代、及び放射性炭素測定年代から、8世紀後半奈良時代後半頃と推定される。

焼成した器種については不明であるが、調査区全体から出土した土師器はすべて煮沸具（壺・鍋）であり、供膳具（椀・皿）は1点も出土していない。このことは、この土師器焼成坑で焼かれた器種は煮沸具であることを示唆するが、焼成後すべて取り出されているとみられるため、確定はできない。

土師器焼成坑の分布については、呉羽丘陵の南西に続く射水丘陵地域、及びこの間に挟まれた境野新扇状地において確認されている。富山市内においては、この南方の射水丘陵東部地域においては、9世紀から10世紀初頭の向野池遺跡〔富山市教委2002b〕で6基、9世紀前半のガメ山遺跡〔富山市教委2002b〕で1基、9世紀後半の開ヶ丘中遺跡〔富山市教委2002c〕で2基、9世紀の開ヶ丘ヤシキダ遺跡〔富山市教委2003〕で4基、8世紀後半から10世紀前半の北押川B遺跡〔富山市教委2008a〕で3基、9世紀後半の御坊山遺跡で2基が検出されており、計18基が確認されている。いずれも煮沸具を主体とした生産で、開ヶ丘中遺跡の1基のみ椀を焼成している。

この射水丘陵東部地域における土師器焼成遺構についての考察にはいくつか注目すべき成果がある。開ヶ丘ヤシキダ遺跡を調査した小黒智久氏によれば、胎土分析や製作技法、形態等を他遺跡と比較した結果、開ヶ丘ヤシキダ遺跡、開ヶ丘中遺跡、ガメ山遺跡、向野池遺跡の4遺跡の土師器製作工人は共通する工人集団に属していた可能性を指摘した〔富山市教委2003〕。また、鹿島昌也氏は8世紀末以降に出現したこれらの遺跡群について、婦負郡域に製品を供給した須恵器生産工人が営んだ先集落（管理型集落）における土師器生産と理解した〔望月・鹿島2010〕。

本遺跡の所在する呉羽山丘陵南部においては、これまで明確な土師器焼成坑は未確認であった。2011年本遺跡の南方に接続した西金屋・西金屋窯跡において奈良後期～平安前期の3基が確認された〔富山市教委2012〕、本遺跡を含めわずか2遺跡に過ぎないものの、土師器焼成坑の存在が確実となった。鹿島氏による須恵器窯群の地域区分では〔望月・鹿島前掲〕、婦負郡域の①呉羽山丘陵西麓の一群に包括され、「呉羽山窯群」と呼称されている。この窯群は、8世紀末まで隆盛した射水丘陵域に引き続き、8世紀末から9世紀代を主体に操業を行っていることから、生産拠点が射水郡から婦負郡に移行した推定されている。射水丘陵では須恵器窯の窯場付近に土師器焼成坑が共存する生産形態をとっていたが、9世紀に入ると、射水丘陵東端地域において窯場から離れて集落（工房）内に土師器焼成坑を構築するよう変化することが明らかにされている。

今回呉羽山丘陵西麓地域においては、これまで須恵器窯のみの確認であったが、新たに2遺跡で土

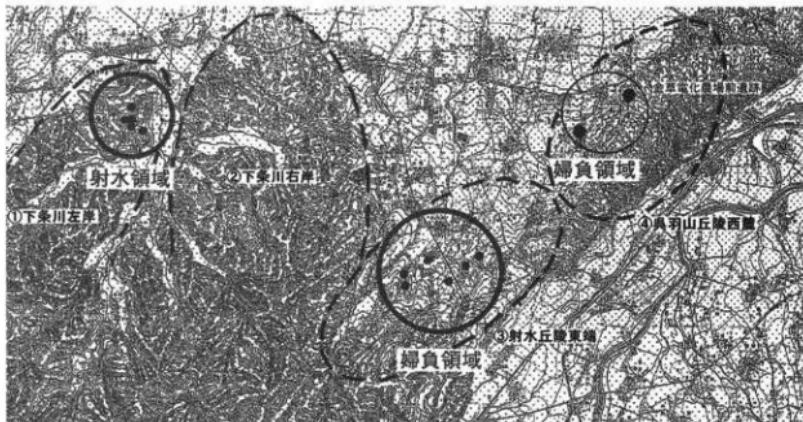


図13 射水丘陵～呉羽山丘陵の土師器生産遺跡群と須恵器窯跡群

実線：土師器焼成坑検出遺跡、破線：須恵器窯群の範囲と地域区分
鹿島作図〔望月・鹿島2010〕を加工修正・加筆

師器焼成坑が確認されたことにより、射水丘陵域との比較が可能になった。西金屋・西金屋窯跡では、8世紀後半から末にかけて3基の土師器焼成坑が存在している。1基は煮沸具主体、2基が食膳具主体で、前者と後者の違いは年代差と理解できるとされる。また前者がこの地域で最も古い段階のものである。遺構検出地点に並ぶ200m上流の谷筋には、8世紀代の須恵器窯群10基が存在し、古沢窯跡群と呼称されている〔富山市教委 1988〕。この窯跡群のうち最も北部に存在する窯が西金屋窯跡で、8世紀中頃の年代が推定されている。この窯と土師器焼成坑は直線距離で100mと近接しており、同じ立地を示し、また年代も重なることから、窯場と一体として存在しているといえる。これは射水丘陵における8世紀末以前の状況と同一であると理解できる。

一方8世紀後半とみられる金草電化農場前遺跡では、焼成された器種は煮沸具の可能性があり、西金屋・西金屋窯跡の焼成器種とはやや異なる。この時期前後の須恵器窯は遺跡より北方の吉作地内に複数所在するが、450m以上離れており、同一の工房内とはいえない。以上により金草電化農場前遺跡の土師器焼成坑は、西金屋・西金屋窯跡とは異なり、須恵器窯場と離れた工房内構造の様相が想定されよう。同時に検出されている土坑には堅穴建物を推定させるものがあるが、土師器焼成坑とは時期差が認められ、土師器焼成坑に伴う工房と積極的に断定することは現段階では難しい。

このような同一生産地域における差異がどのような理由によるものかについては、今後の試料の蓄積を待って再検討する必要があろう。
(古川)

参考文献

- 小松市教育委員会 2002『二ヶ梨一貫山空跡』
富山市教育委員会 1970『富山市金草第一号窯跡調査報告』
富山市教育委員会 1981『白鳥城跡試掘調査概要』
富山市教育委員会 1983『白鳥城跡試掘調査概要(II)』
富山市教育委員会 1984『白鳥城跡試掘調査概要(III)』
富山市教育委員会 1988『昭和62年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
富山市教育委員会 2002a『富山市板谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
富山市教育委員会 2002b『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002c『富山市開ヶ丘中山1遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘中遠跡・開ヶ丘孤谷遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002d『富山市開ヶ丘中山III遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘中山V遺跡・開ヶ丘孤谷遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003『富山市開ヶ丘中山III遺跡・開ヶ丘孤谷III遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008a『富山市北押川B遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008b『富山市北押川C遺跡・御坊山遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2012『富山市内遺跡発掘調査概要VI』
西井龍儀・小林高範 2005『呉羽山古道の調査』『大境』第25号 富山考古学会
西井龍儀・藤田富士夫 1976『呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について』『大境』第6号 富山考古学会
東村武信 1990『改訂 考古学と物理化学』212p., 学生社.
藤田富士夫 1983『日本の古代遺跡 13 富山』保育社
麻柄一志 1998『北陸の弥生系高地性集落の出現と消滅』『奈良・70の疑問 古代探求』中央公論社
宮脇昭緒 1985『日本植生誌 中部』604p., 宝文堂.
望月精司 1997『土師器焼成坑の分類』『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
望月精司・鹿島昌也 2010『第3章 北陸の古代土器生産と窯・工房・工人集落』『古代窯業の基礎研究—須恵器窯の技術と系譜—』窯跡研究会
Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. 1998 INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

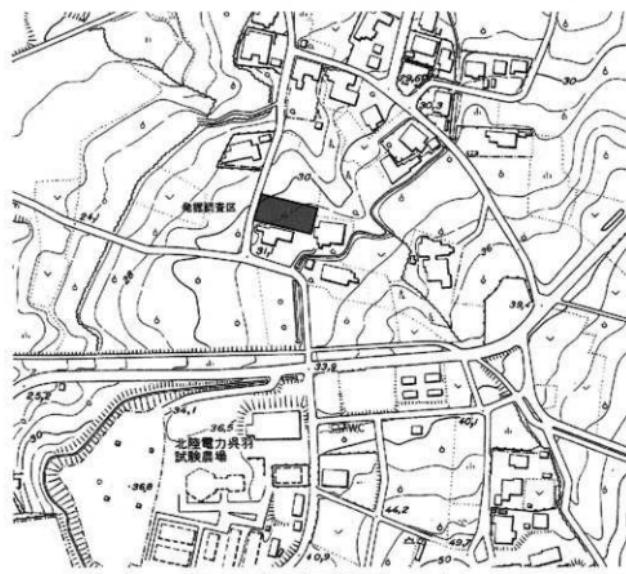


図3 発掘調査区位置図(1:3,000)

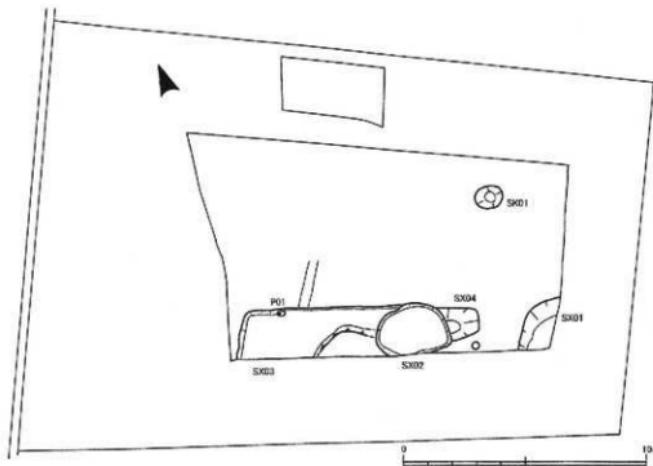
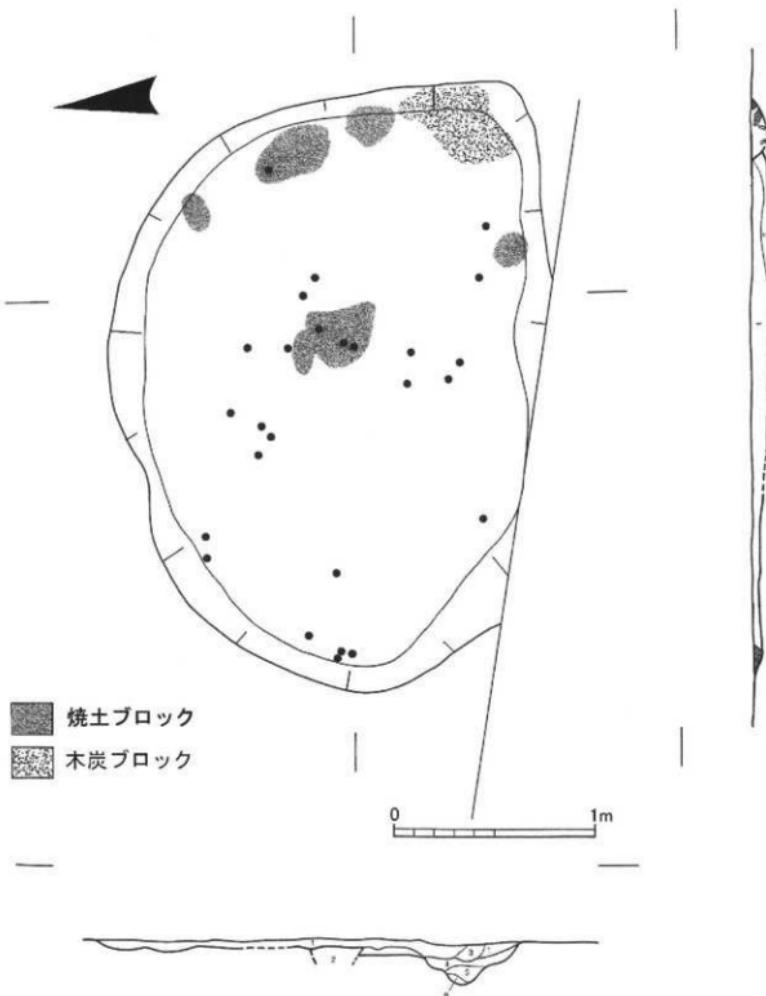


図4 発掘調査区位置図(1:200)



SX02 土層

1 黒褐色土（木炭・焼土ブロックを含む）

2 青褐色土

3 褐色土

4 青褐色土

5 棕色土（しまりなし）

6 黄灰色粘質土

図 5 土師器焼成遺構 SX02 実測図(1:20)

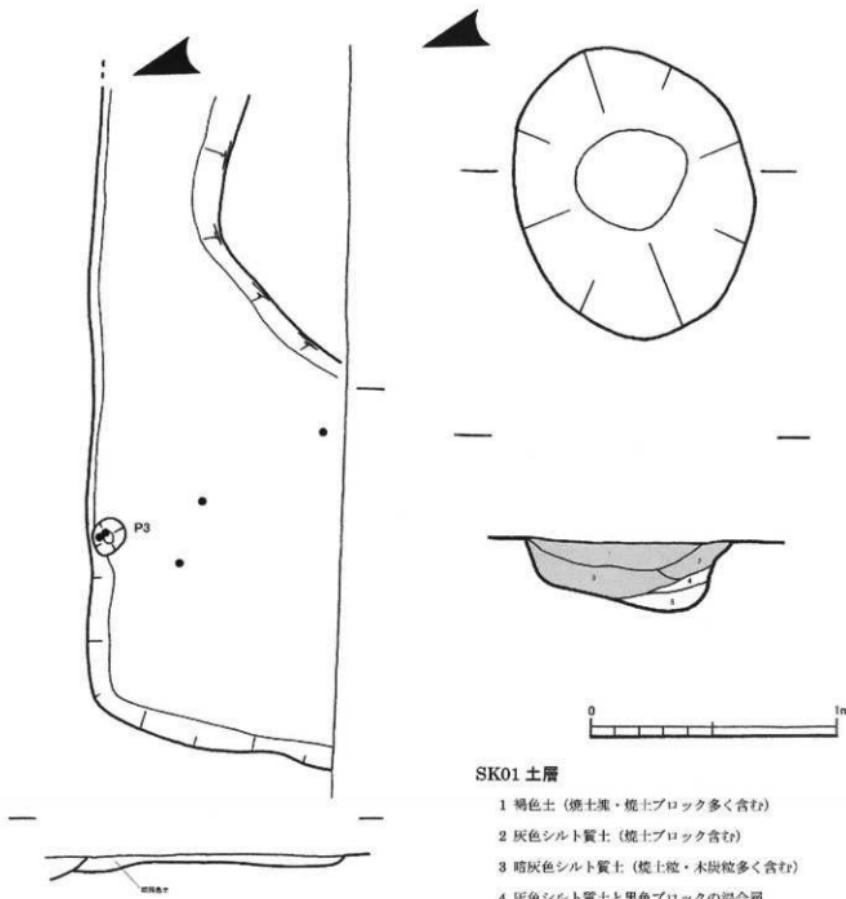


図 6 坑穴状遺構 SX03 実測図(1:20)

●は土器出土位置

SK01 土層

- 1 暗褐色土 (焼土塊・焼土ブロック多く含む)
- 2 灰色シルト質土 (焼土ブロック含む)
- 3 暗灰色シルト質土 (焼土塊・木炭粒多く含む)
- 4 灰色シルト質土と黒色ブロックの混合層
- 5 暗褐色土

図 7 土坑 SK01 実測図(1:20)

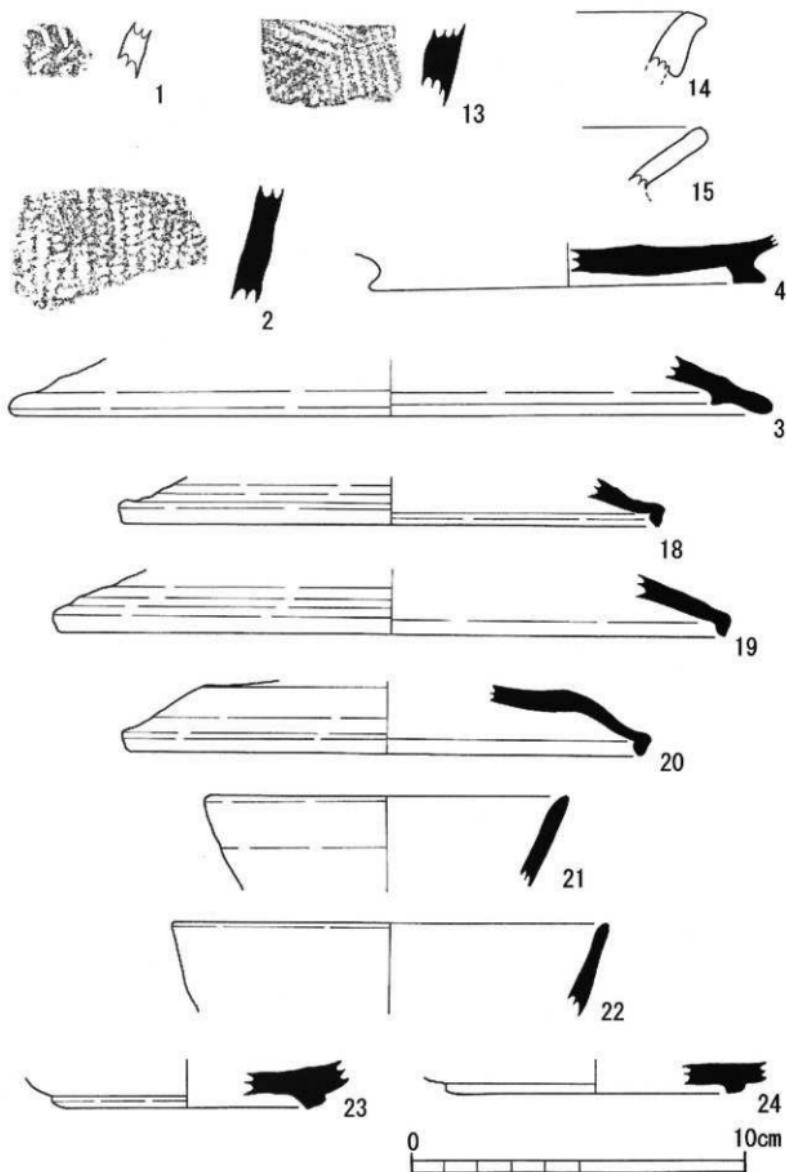


図 8 遺構出土遺物 (SX02 : 1,4、SX03 : 3,13、SX02 : 18~24、P04 : 14,15)

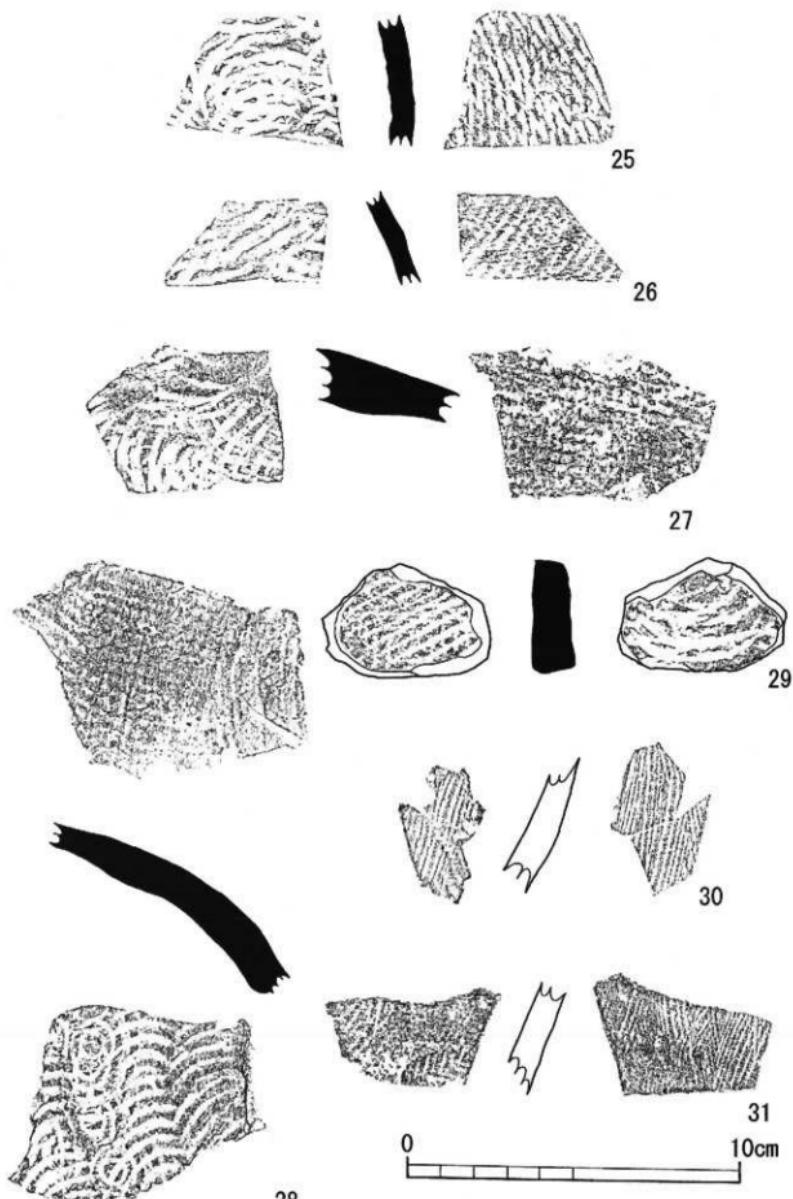


図9 遺構出土遺物 (SX02 : 25~28,30~31、SK01 : 29)

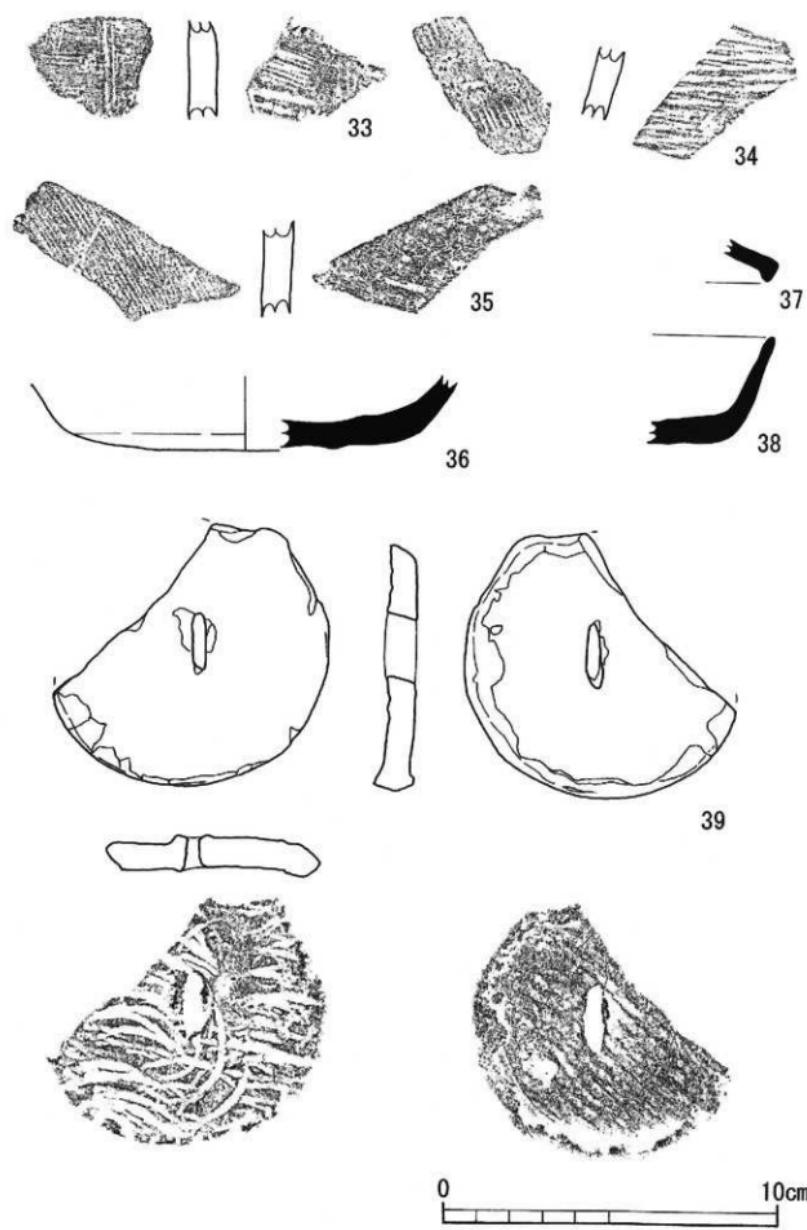


図 10 遺構出土遺物 (SX02 : 33~35、SX04 : 36、SK01 : 37~39)

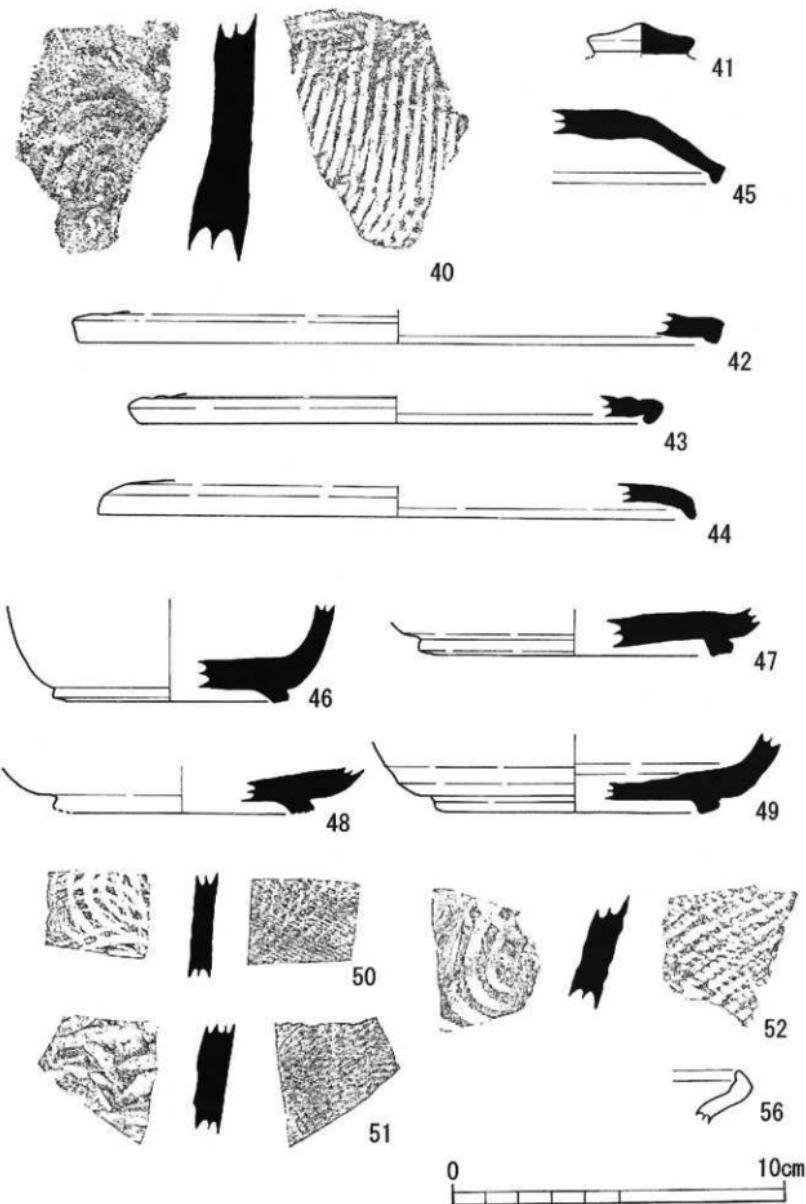
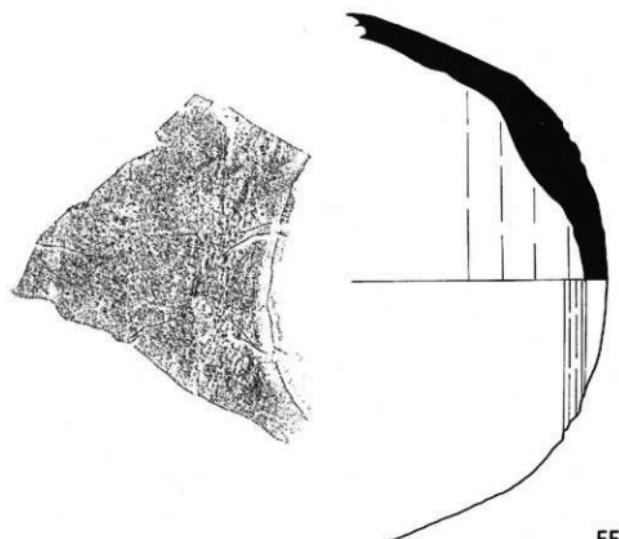
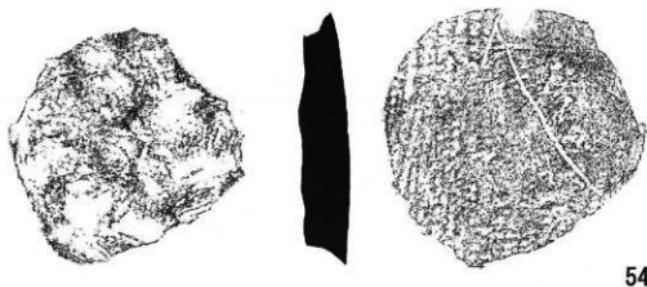


图 11 遗構・遺物包含層出土遺物 (SK01 : 40、遺物包含層 : 41~56)



0 10cm

圖 12 遺物包含層出土遺物



写真1 調査区近景（東から）



写真2 調査区南西端土層断面



写真3 遺構検出状況（北東から）



写真4 遺構 SX02 検出状況（南西から）



写真5 土師器焼成坑 SX02 東壁 焼土・木炭

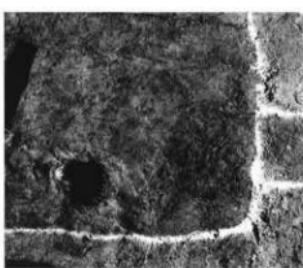


写真6 土師器焼成坑 SX02 東壁木炭

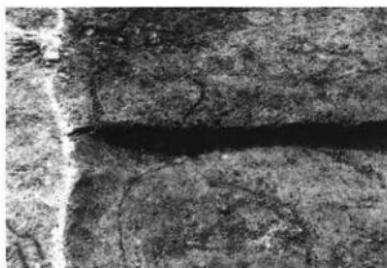


写真7 土師器焼成坑 SX02 東壁焼土断面



写真8 土師器焼成坑 SX02 遺物出土状況（北から）



写真 9 土師器焼成坑 SX02 遺物出土状況（南から）



写真 10 土師器焼成坑 SX02 完掘状況（南から）

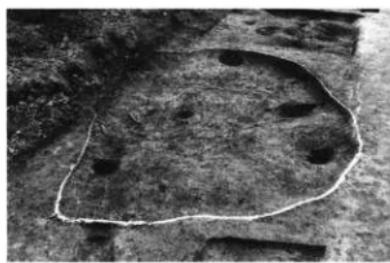


写真 11 土師器焼成坑 SX02 完掘状況（南から）



写真 12 土坑 SX01 完掘状況（西から）



写真 13 土坑 SX03 遺物出土状況（北西から）



写真 14 土坑 SX03 完掘状況（西から）



写真 15 土坑 SK01 土層断面（北西から）

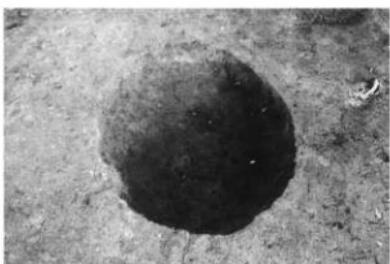


写真 16 土坑 SK01 完掘状況

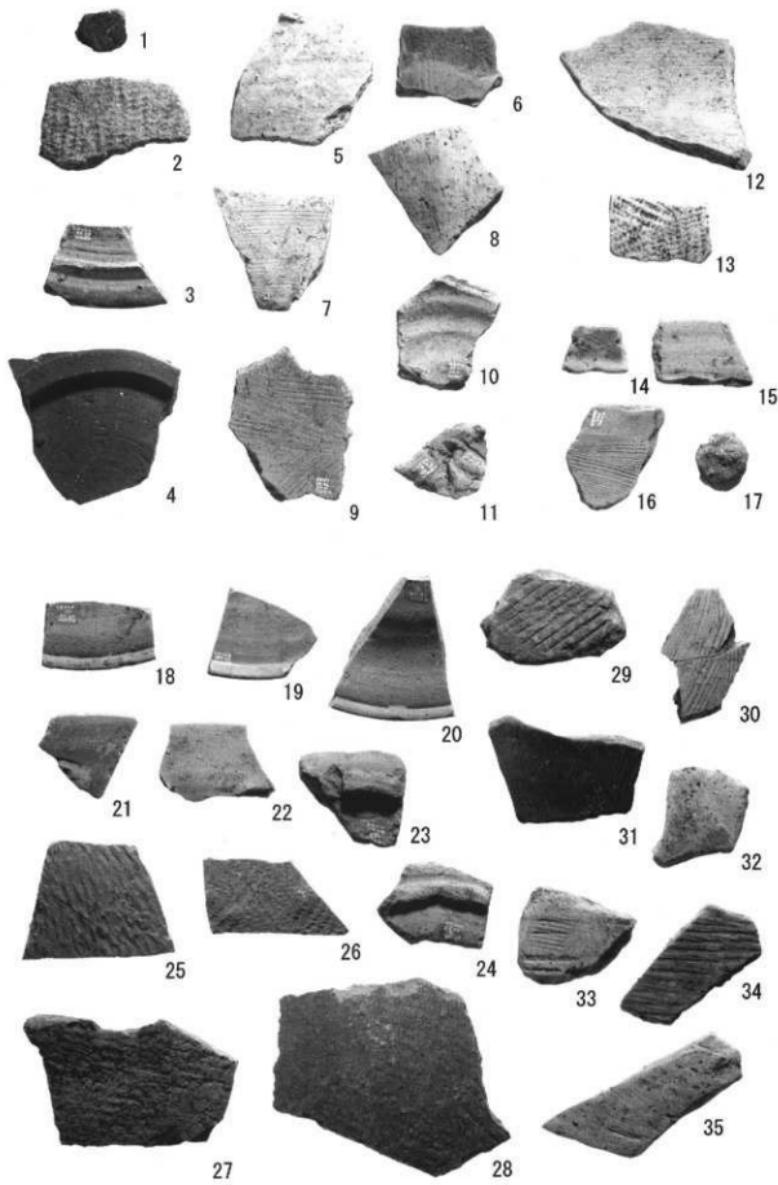


写真 17 金草電化農場前遺跡出土遺物写真（番号は遺物実測図と同一）

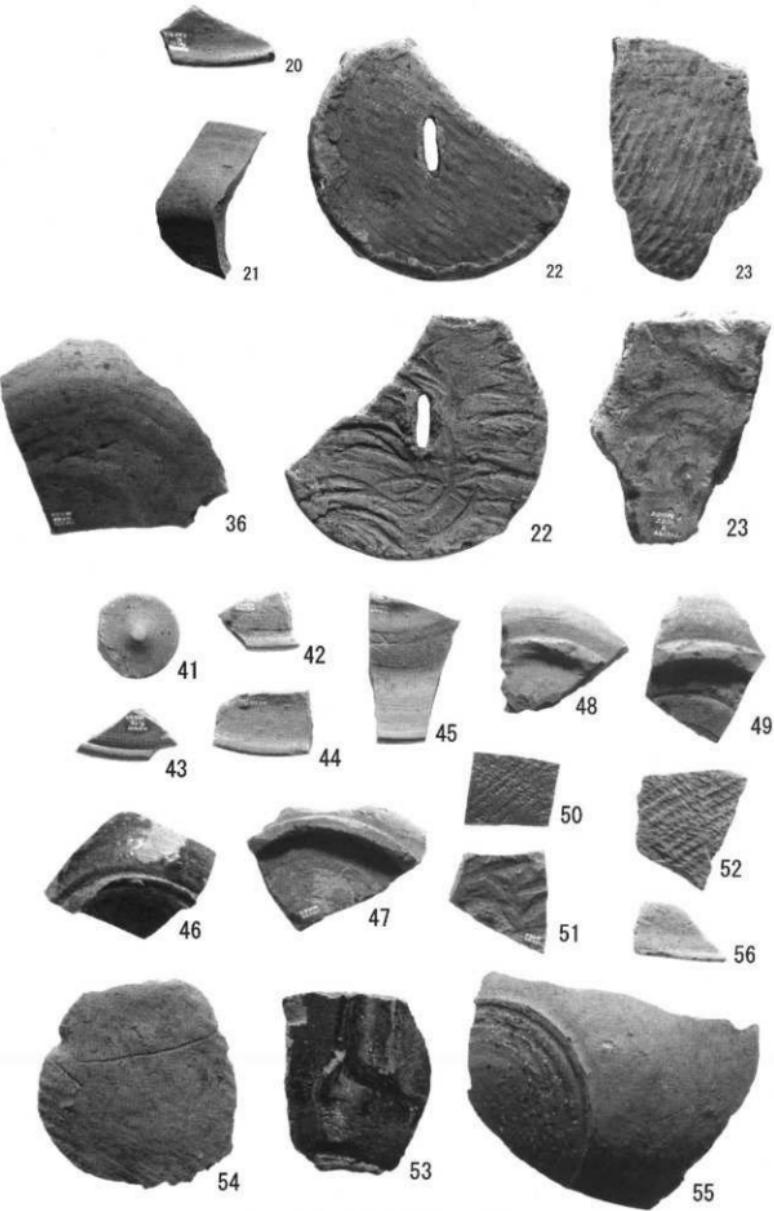


写真 18 金草電化農場前遺跡出土遺物写真

II 呉羽富田町遺跡

1 調査の経緯

呉羽富田町遺跡（富山市遺跡番号 201160）は、昭和 51 年 3 月発行『富山市遺跡地図』に登載され、No.20「呉羽富田町遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地となった。このとき、遺跡は 2 地区に分かれて包含地となっており、縄文中期（土器）・石斧・土師器の記載がある。昭和 63 年～平成 3 年度に実施した分布調査の結果を受け、年代や遺跡の性格を見直し、遺跡範囲を修正した。この内容は、遺跡のうち北西端の墓地は、通称「シャクドジ」と呼ばれる寺院跡の伝承があり、五輪塔・板碑が存在するため切り離して No.159「北代シャクドジ遺跡」と変更した。分布調査では、遺跡範囲より広がって縄文・古代の遺物が採集された。その範囲は遺跡東側の県道よりさらに東に広がり、No.24「北代 B 遺跡」（土師器・須恵器の包含地、県遺跡番号 No.702）と、No.23「谷野呉山病院遺跡」（陶錐・土師器の包含地）を含めて、新たに呉羽富田町遺跡とし、遺跡番号は 201160 とした。

昭和 52 年、遺跡の北西部において宅地造成工事が計画され発掘調査を実施した。奈良時代末から平安前期の堅穴住居跡 4 棟、縄文晩期土器・石器、古代の須恵器・土師器・土錐が出土した〔富山市教委 1978〕。

平成 13 年 11 月、富山市北代字伊佐波 5278 番地において個人住宅建設の事前協議がなされた。開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「呉羽富田町遺跡」の東部に該当するため、11 月 28 日に埋蔵文化財センター堀沢祐一学芸員が担当して試掘調査を行った。その結果、開発区域の南西部 41 m²において、表土下約 40 cm に上坑等の遺構を確認した。このため、遺跡の保護措置について協議したところ、基礎工事が遺跡面まで到達するため、記録保存措置を講ずることで合意した。

発掘調査は、埋蔵文化財センター古川知明主任学芸員が担当し、翌平成 14 年 3 月 13 日から 3 月 14 日まで 2 日間で行い、記録保存措置を完了した。調査面積は 44 m²であった。現地発掘作業については国庫補助事業とした。

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

富山平野を二分する呉羽丘陵は、富山市街地に向する南東側が急傾斜地、北西侧は緩傾斜地となっている。この地形は、南東側山麓に沿って走る呉羽山断層に起因すると考えられている。北西侧の緩斜面地の北端には台地状地形が形成されており、長岡台地と呼ばれている。それ以南の丘陵地は、山頂から開析谷が幾筋も入り込み、馬背状の長い舌状丘陵を形成している。

遺跡周辺の微地形を国土地理院発行の地質図によって見ると、南西側から延びる丘陵地山地地形



図 1 呉羽富田町遺跡位置図(1:50,000)



図 2 呉羽富田町遺跡と周辺の遺跡(1:10,000)

（番号は市遺跡番号 201 以下の下 3 衔番号）

で、遺跡周辺まで標高が下がると平坦な地形を形成するが、この平坦面は河岸段丘中位面と区分されている。この中位面は北側の長岡台地を含め周間に広がっており、その平坦面は丘陵尾根部分から主に北西に延びる開析谷によって分断され、帯状の谷低地は谷底平野を形成している。この谷底平野に入り込む凹地・浅い谷の形成も顕著である。遺跡範囲は、このうち中位面上にあり、北側から大きな谷が1本入り込んでいる。遺跡の南端には、面積が狭い高位面の形成がある。調査地点の基盤地形は、ほぼ平坦であるが、わずかに北西に向かって傾斜していく。これは山頂方向から北西に向かって傾斜する全体地形の影響と思われる。調査地点での標高は約17mである。

遺跡地は、表層が腐植土、いわゆる黒ボクであり、粘質を持つ。その下の地山上は粘質の黄色火山灰層で、再堆積層とみられる。

(2) 歷史的環境

呉羽丘陵西側緩斜面地には、その地形の特性を利用して、旧石器時代から近世まで各時代の遺跡が営まれている。その数も多く、この一帯は富山市でもっとも遺跡密度の高い地域のひとつといえる。

遺跡の北側谷地を挟んで北側の中位段丘面には、国史跡北代遺跡が所在する。この遺跡は旧石器時代から古代の中核的集落遺跡で、特に縄文時代中期には推定 200 棟に及ぶ大規模集落が形成された。北代遺跡では後期旧石器時代のナイフ形石器が出土しており、台地における初現である【西井・藤田 1976】。北代遺跡では発掘調査の成果に基づき土屋根積穴住居群が復元され、注目されている【富山市教委 1999】。この長岡台地の北部には、縄文晩期を主体とする長岡八町遺跡がある。平成 15 年の発掘調査では後期から晩期の谷部廐棄遺構から多量の縄文土器・石器が出土し、北陸最大級とみられる土偶頭部が出土した。廐棄遺物には呪術に用いたとみられる石器も多数出土し、それらの多くが熱を受け破碎していることが注目された【富山市教委 2003a】。

弥生時代は北代遺跡で天王山系土器が少量存在する〔富山市教委 1979〕。

古墳時代前期には遺跡東方の呉羽山丘陵頂部に、杉坂古墳群が形成される〔古川 1999〕。この生産基盤としての集落は、呉山西麓の長岡台地北側神積地において八町II遺跡などが成立する〔富山市教委 2008〕。

奈良・平安時代には、長岡台地の各地と長岡台地北側冲積地において、多くの集落遺跡が出現する。この一帯は奈良時代射水郡に属する寒江郷の候補地であり、沖積地や谷底平野において水田耕作、台地上に集落經營が行われたとする見解も提起されている〔富山市教委 1989〕。平安時代前期9世紀後半には再び台地上の遺跡数の増加が認められ、同様に第二波の開墾が想定される。本遺跡南側に近接した茶屋町西山遺跡では、10世紀代とみられる製鉄炉・炭窯が確認されている〔富山市教委 2003b〕。それまで射水丘陵や吳羽丘陵南部における鉄生産が、平安前期以降吳羽丘陵北部へ移行していったものと考えられる。

中世末には奥羽山最高峰城山山頂に白鳥城跡が築城された〔富山市教委 1981・1983・1984〕。これらは主に天正 13（1585）年豊臣秀吉が家臣である富山城主佐々成政攻めを行う際拠点とした時期の遺構と推定したものである。空堀跡においては数回にわたる改修痕が確認されており、それ以前に居



図3 遺跡周辺の地質

ベース図は平成17年国土地理院発行「富山平野中心部の地質図」

城したと記録に見える神保氏時代の遺構を含む可能性がある。この時、安田城・大船城の二つの出城が築かれ、前田利家家臣が防衛に当たったとされている。史料ではこのほかに安養坊に利家が拠ったとする記述もあり、白鳥城以北に存在する山稜のどこか、安養坊付近に砦を構えた可能性がある。これについては、IV章の測量調査成果の項で検討する。

3 調査の成果

現況は畑であり、耕作土（黒色腐植土）下30~50cmにおいて遺構を検出した。耕作は芋類等のため遺構検出面より下まで及んでおり、遺構識別に困難を要した。耕作土中に黒色土遺物包含層を残す部分が若干存在し、また地山上は黄色火山灰層である。地山は北西に向かってわずかに傾斜しており、最大高低差は12cmである。

(1) 遺構

掘立柱建物3棟、土坑1基を確認した。掘立柱建物はいずれも柱穴の部分的な検出で、全体規模は不明である。

①掘立柱建物

S B01 柱穴2基、南側桁行柱穴2基の計4基を検出した。いずれも東西に延び、桁行3間以上の側柱建物と推定される。柱穴の掘り方は平面隅丸方形で、北側桁行は一辺60~80cm、深さは約50cmである。P4では柱痕が確認でき、柱径は約20cmに復元できる。この柱痕は斜めになっており、抜き取りを示すと考えられる。また、掘り方底部の柱底に当たる部分は、5cmほど深く掘り下げられ、そこに黄色粘土を充填して堅く締め柱底を安定するような施工を行っている。南側桁行は一辺85~100cm、深さは約50~65cmで、北側桁行より一回り大きく深い。P1・2の柱痕から、柱径は25~30cmと復元できる。P1では建替とみられる柱底部の移動がある。柱穴の心心間は両桁行とも各々2.45mである。柱列の主軸は北側N-72°-W、南側N-74°-Wでわずかにずれる。SB01の棟方向とはほぼ同じである。P1からは須恵器杯身、土師器中形甕・長胴甕・鍋、P2からは須恵器杯蓋、土師器中形甕・長胴甕、焼成粘土塊、P3の上層からは須恵器杯蓋、土師器片、P4からは土師器中形甕が出土した。

S B02 柱穴3基による柱列を検出した。桁行か梁行かは不明。建物構造も不明である。柱穴の掘り方は平面隅丸方形で、一辺65~90cm、深さは約40~50cmである。P1の柱痕から、柱径は25cmと復元できる。P1では柱底部に黄色粘土を敷き固め、柱を置いた後周囲を同じ粘土で包み、安定させる工夫を行っている。柱穴の心心間は各々1.8mである。柱列の主軸はN-73°-WでSB01とはほぼ同じである。P1からは須恵器杯蓋、土師器甕・鍋、P2からは須恵器杯蓋・杯身、土師器皿・中形甕・長胴甕、鉄板、P3からは須恵器杯身・甕、土師器中形甕・鍋が出土した。

S B03 柱穴3基による柱列を検出した。桁行か梁行かは不明。柱穴は平面円形で、掘り方は円形・梢円形、掘り方径は45~50cm、深さは約30cmである。柱穴の心心間は各々1.3mである。柱列の主軸はN-33°-Wで、SB01・02と40度ほどずれている。P1が北端で、その東西には柱穴が存在せず、柱径も小さいことから、柵列（堀）の可能性がある。P3より南へ延びている可能性がある。P2からは須恵器杯身、鉄滓、P3からは土師器中形甕が出土した。

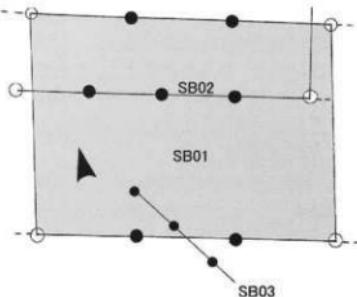


図4 掘立柱建物配置概念図

黒丸は検出した柱穴、白丸は推定
網掛けはSB01の最小規模

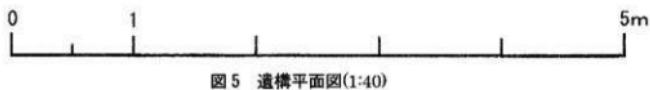
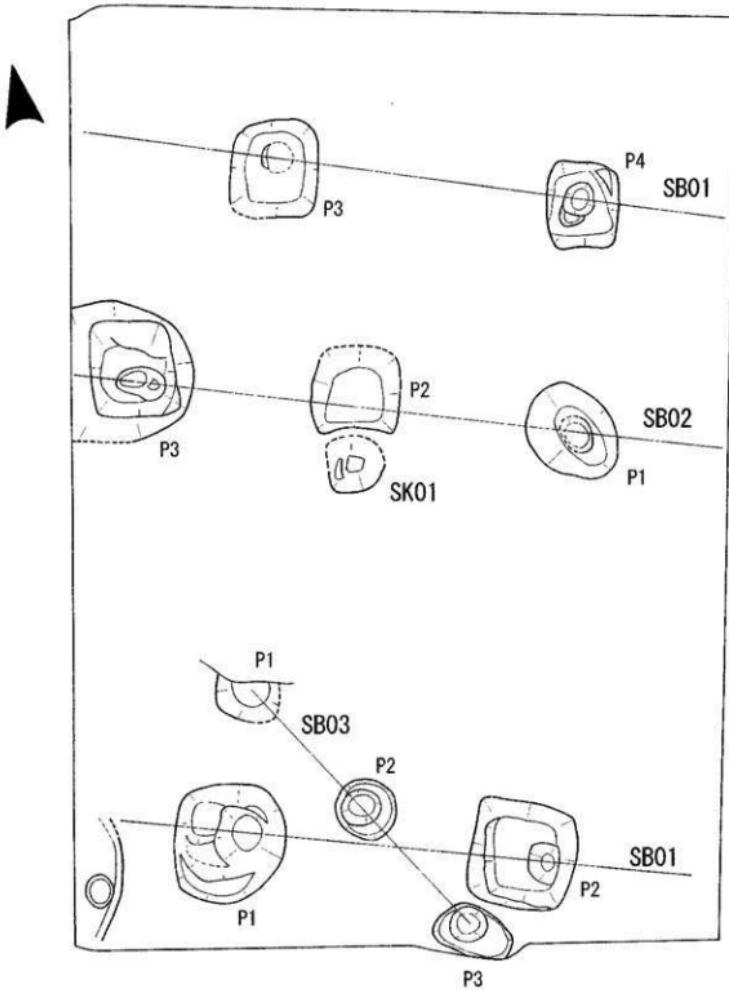
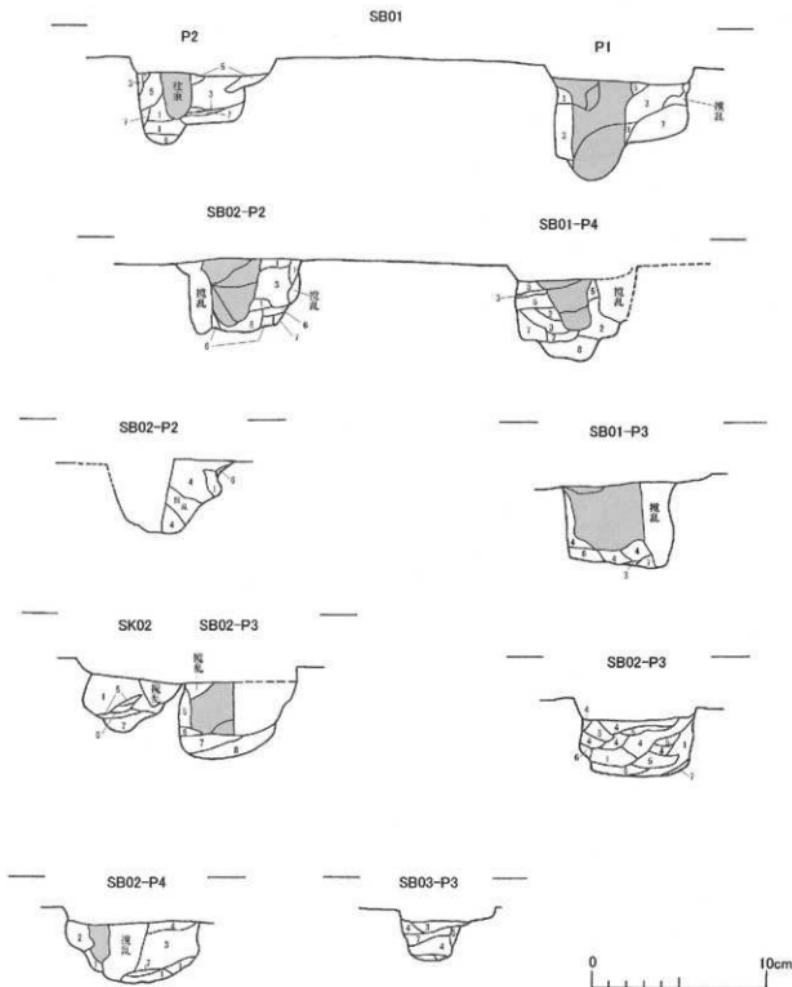


図5 造構平面図(1:40)



土層注記

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土（黄色地山上をブロック・粒状に含む）
- 3 黒色土
- 4 砂褐色土
- 5 噴褐色土（黄色地山上をブロック・粒状に含む）
- 6 黄褐色粘質土
- 7 黄色粘質土
- 8 黄色粘土（硬化）

図 6 遺構断面図

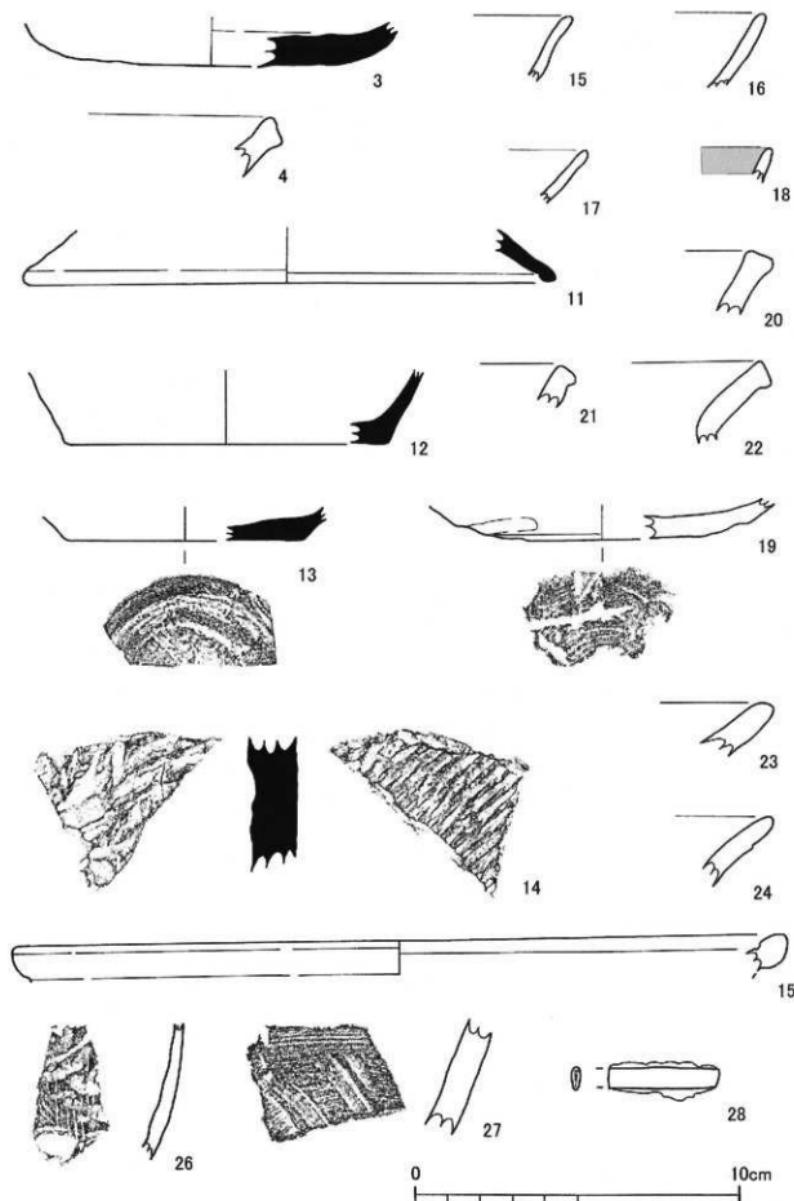


図7 呉羽富田町遺跡出土遺物実測図

図4は遺物配置を概念図として示したものである。

②土坑

SK01 SB02-P2の南側に接して存在する。径45cmの隅丸方形状の穴で、深さは40cm。底面中央が丸く窪む。柱穴と推定されるが、周囲に関係する同規模の柱穴が存在しないため、規模性格は不明である。出土遺物はない。

(2) 遺物(図7・写真22)

須恵器・土師器・鉄製品・鉄滓がある。

① 須恵器

杯蓋 1・2は器壁が薄く、扇曲がある。頂部はケズリ整形を行う。9世紀後半頃とみられる。1・2は同一個体で、1はSB02-P1下層、2はSB02-P2出土。11は端部を薄く小さく丸める。9世紀後半頃である。SB02-P1からも11と同形態の杯蓋が出土している。

杯身 3は酸化焼成の底部である。無台で厚みがある。8世紀代か。SB02-P2出土。12は無台の底部で、底から体部への移行は、丸みをもたずくの字形に屈曲し、外傾度は60度である。器壁は3.5mmと薄い。9世紀後半頃に属する。13も同形態で、外傾度は12より外側に開く。12・13は遺物包含層出土。

大甕 14は体部で、外面平行タタキ内面平行当て具痕を残す。9世紀代とみられる。遺物包含層出土。

② 土師器

椀 ロクロ整形品である。15は内外面赤彩とみられる。口縁端は外反する。16はやや内湾する。口唇部には油煙が付着する。19は糸切底で無肩台である。15・16・19とも遺物包含層出土。

皿 17は直線的に外傾する口縁で、外面が赤彩とみられる。ロクロ整形。遺物包含層出土。

内黒焼 18は内面を磨き黒化させた内黒土器である。ロクロ整形。遺物包含層出土。

中形甕 7は底部で、底面ケズリ、体部縱方向のケズリである。底面中央で器壁2mmと極めて薄い。SB01-P4出土。

長胴甕 4はくの字形に外反した口縁端を面取し、上端を上につまみ上げる。端角は角ばる。SB02-P1出土。20は4に近い口縁形態であるが、端角は丸みを持たせる。21・22は4と同じ口縁形態。以上は8世紀後半のもの。23・24はくの字形の口縁部で、23は厚みがある。25は口縁端を内側に丸く折り曲げる。9世紀後半～10世紀前半。26は体部下半で、外面熟剥落、内面ハケメ後同心円当て具痕である。器壁は3～4mmと薄い。20～26は遺物包含層出土。

鍋 5は体部上半で、外面カキメ内面ヨコナデ。SB02-P1出土。6は体部下半で、外面斜め方向のケズリ、内面斜め方向のハケメ後ヨコナデ。SB02-P2出土。27は体部片で、外面横方向のケズリ、内面カキメ後斜め方向のヘラケズリである。遺物包含層出土。

③ 鉄製品 27は厚さ1mmの鉄板片である。周囲が欠けている。用途部位は不明。重量2g。SB02-P2出土。28は刀子中茎とみられる。長3.4cm、高7mm、幅3mm、重さ4gである。遺物包含層出土。

④ 鉄滓 10は製鍊滓である。重量12g。SB03-P2出土。

4 総括

(1) 遺跡の性格

貴羽富田町遺跡は、昭和52年の発掘調査において竪穴建物を検出しており、当時の報告では8世紀末～9世紀初頭に位置付けている〔富山市教委1978〕。その後古代遺跡の発掘調査の増加に伴い土器資料が蓄積し、池野正男氏らによる編年研究〔池野1997ほか〕が進展し、8世紀～10世紀の土器編年が組み上げられた。それらの成果に基づき昭和52年の竪穴建物出土土器を再検討すると、9世紀前半から中期にかけての様相と理解される。

今回調査で出土した土器は、わずかに8世紀代のものが存在するが、ほとんどは9世紀代におさまる、一部10世紀にかかる時期のものを含む。昭和52年の調査でも包含層出土品にはこの時期幅が認められる。したがって遺跡の形成年代は、8世紀後半（奈良後半）から出現し、9世紀前半に竪穴建

物群の形成があり、10世紀前半に終息したとみられる。

今回の調査では掘立柱建物群が3棟確認し、竪穴建物は検出していない。この掘立柱建物の構築年代は、柱穴から出土した土器からみていずれも9世紀中葉以降の年代が想定できそうである。ただし建物間の重複関係や建て替え、棟方向の違いなどから、相当期間の存続が推定される。本遺跡の東300mに所在する長岡杉林遺跡では、9世紀末から10世紀初頭の掘立柱建物が検出されており、その柱振り方は隅丸方形で一辺70cmと大きい〔富山市教委1987〕。柱穴規模からみてもその年代と理解してよいであろう。

なお、平成5年に遺跡範囲を見直し、複数の遺跡を統合した。遺跡内端の昭和52年地点と遺跡東端の平成13年地点の発掘調査を比較すると、遺跡の存続期間はほぼ一致するが、昭和52年地点は竪穴建物のみ、平成13年地点は掘立柱建物のみといった建物種類の相違が認められる。この相違の理由について、時期差であるか、あるいは地点による遺跡の性格の違いであるかは不明である。時空的に近接する長岡杉林遺跡では、8世紀代には竪穴建物+掘立柱建物であるが、9世紀末以降は掘立柱建物のみとなる。また、本遺跡の西900mの吳羽小竹堤遺跡では、遺物の詳細は不明であるが9世紀～10世紀の竪穴建物+掘立柱建物が検出されており、このうち竪穴建物は鍛冶工房と推定している〔富山市教委1989〕。このように時期・性格により建物の時空的な分布は多様であるため、ただちに本遺跡における建物分布の違いについて結論を出すことは困難である。

(古川)

参考文献

- 池野正男 1997「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
池野正男 2010「ロクロ十師器皿拂具の牛両と流通」『大境』第28号 富山考古学会
内田圭紀子 2000「越中婦負郡の古代七師器煮沸具」『富山考古学研究』紀要第3号 財團法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
富山市教育委員会 1978『富山市吳羽富田町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 1981『白鳥城跡試掘調査概要』
富山市教育委員会 1983『白鳥城跡試掘調査概要(II)』
富山市教育委員会 1984『白鳥城跡試掘調査概要(III)』
富山市教育委員会 1987『長岡杉林遺跡』
富山市教育委員会 1989『昭和63年度富山市埋蔵文化財発掘調査概要』
富山市教育委員会 1997『富山市太閤山カントリークラブ地内遺跡群発掘調査報告書(1)』
富山市教育委員会 1999『史跡北代造跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書』
富山市教育委員会 2003a『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2003b『富山市北代西山II遺跡・茶屋町遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2008『富山市八町II遺跡発掘調査報告書』
西井龍儀・藤田富士夫 1976「吳羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『人境』第6号 富山考古学会
古川知明 1999「富山市杉坂古墳群」『富山平野の出現期古墳 発表要旨・資料集』富山考古学会



写真1 調査区近景 (から)



写真2 遺構検出作業風景



写真3 遺構検出状況 (東から)



写真4 遺構検出状況 (南東から)

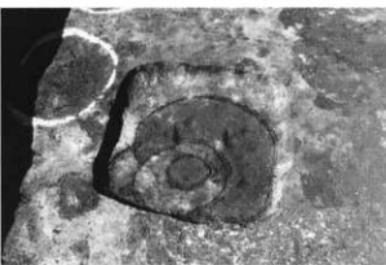


写真5 挖立柱建物 SB01-P2 柱痕検出

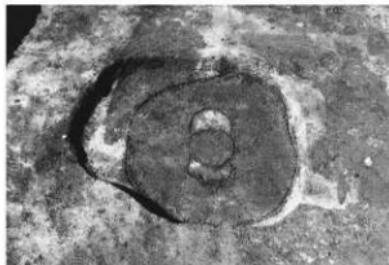


写真6 挖立柱建物 SB01-P1 柱痕検出



写真7 挖立柱建物 SB01-P4 土層断面



写真8 挖立柱建物 SB02-P1 土層断面

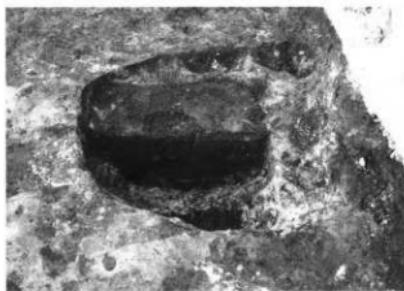


写真 9 挖立柱建物 SB02-P3 土層断面



写真 10 挖立柱建物 SB01-P2 土層断面



写真 11 挖立柱建物 SB02-P2・SK01 土層断面

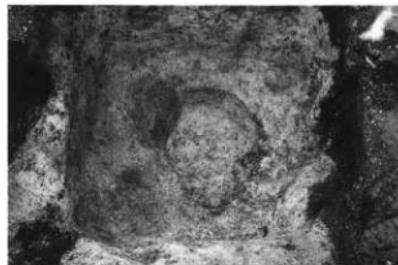


写真 12 挖立柱建物 SB01-P4 柱底粘土

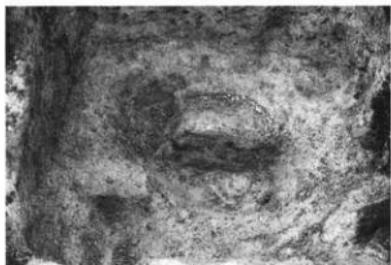


写真 13 挖立柱建物 SB01-P4 柱底粘土断面

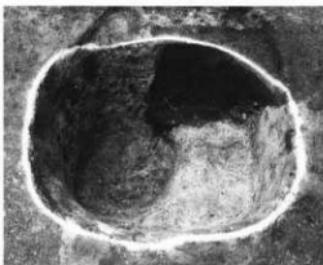


写真 14 SB03-P3 完掘状況



写真 15 SB01-P3 完掘状況

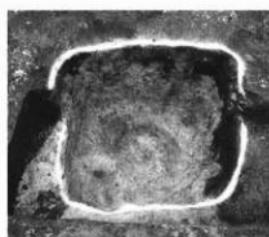


写真 16 SB01-P4 完掘状況

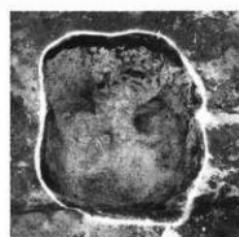


写真 17 SB01-P1 完掘状況

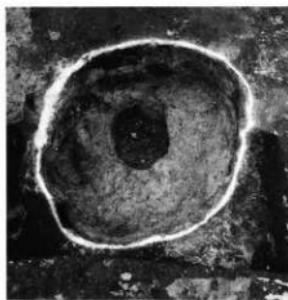


写真 18 SB02-P1 完掘状況

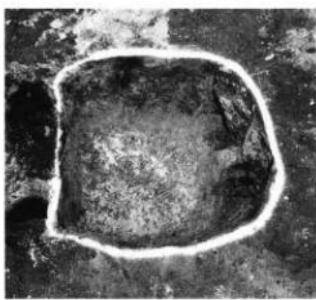


写真 19 SB02-P2 完掘状況



写真 20 調査区全体（南から）



写真 21 調査区近景 SB01・02（東から）

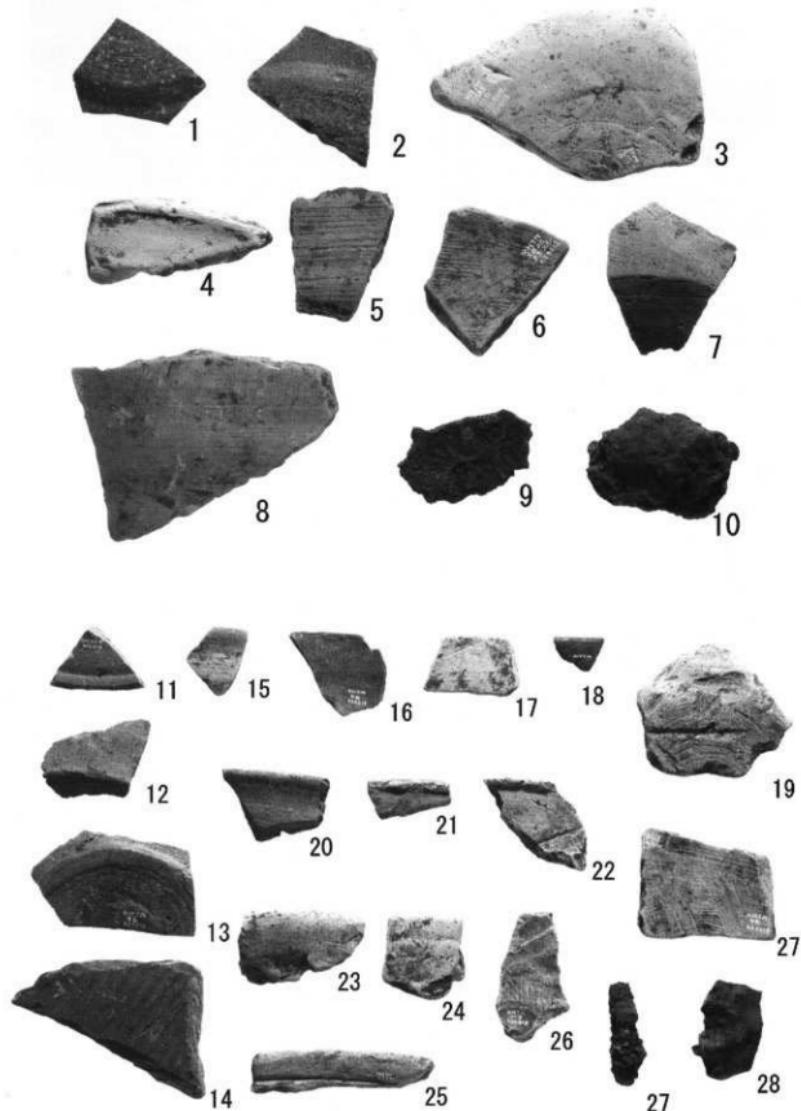


写真22 出土遺物

III 茶屋町東遺跡（測量調査）

1 調査の経緯

茶屋町東遺跡（富山市遺跡番号 201595）は、平成 6 年 1 月分布調査によって確認し、同年 4 月に遺跡地図に搭載した遺跡である。複数の曲輪状平坦面や土壠状遺構、空堀状遺構を確認したが、遺構認定は保留した。その後土壠状遺構と考えていた斜面に垂直方向に延びる土手は、大正 14 年設置された呉羽山インクライン〔五福校下自治振興会編 1991〕の軌道に関連する施設跡と考えられたため、これを除外した。その結果、遺跡は尾根山頂の東西両側にまたがる 90,000 m² に及び、201593 茶屋町山ノ下遺跡（绳文時代の散布地）、201594 北代西山Ⅲ遺跡（古墳時代前期の散布地）を遺跡内に含むことになった。

2010 年遺跡の東側斜面において富山市建設部による竹林等伐採事業が行われ、地表面が露出することになったため、同年 5 月現地確認を行い、遺物表面採集と主要な曲輪状平坦面や空堀状遺構の測量を行ったものである。調査は、古川知明所長、小林高太嘱託学芸員、速沼優介嘱託学芸員が担当した。

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

富山平野を二分する呉羽丘陵は、富山市街地に面する南東側が急傾斜地、北西側は緩傾斜地となっている。この地形は、南東側山麓に沿って走る呉羽山断層に起因すると考えられている。

遺跡周辺の微地形を平成 17 年発行国土地理院発行の地質図によって見ると、南西から北東に延びる丘陵地の山地地形で、分水嶺は南東斜面側に寄って北東から南西方向に延びる。南東斜面はところどころ崖面が形成されており、急崖であることを示す。地質図には表示されていないが、この南東斜面の途中には所々大小規模の平坦状地形が形成されており、またそれらの間には開析により谷が幾筋も入り込んでおり、浅い谷やくぼ地を形成している。

丘陵北西側は緩い傾斜地となっており、麓付近には平坦な台地地形を形成する。この平坦地形は河岸段丘高位面・中位面と区



図 1 茶屋町東遺跡と周辺の城館位置図(1:50,000)

- 1 茶屋町東遺跡
- 2 白島城跡
- 3 大峰城跡
- 4 安田城跡



図 2 遺跡周辺の地質 ●印が調査地

ベース図は平成 17 年国土地理院発行「富山平野中心部の地質図」

分されている。この中位面は北側の長岡台地を含め周囲に広がっており、その平坦面は丘陵尾根部分から主に北西に延びる開析谷によって分断され、帯状の谷底地は谷底平野を形成している。この谷底平野に入り込む凹地・浅い谷の形成も顕著である。斜面上部の分水嶺近くにも高位段丘面が複数認められる。このような大小平坦面は、北西側斜面中～上部においても、南西斜面同様に多数存在し、同様に開析谷も多数入り込む。西側斜面における谷筋には湧水が顕著である。これが南東側斜面における谷地との大きな相違である。

南東側斜面の麓直下は、神通川・井田川による氾濫平野が広く形成されている。分水嶺とこの氾濫平野の比高差は、約 60m である。氾濫平野においては顕著に蛇行する神通川・井田川の旧流路が幾筋も認められ、山麓にまで到達する流路もある。この蛇行した内面側は島状の高台が発達し、低位段丘面を形成する。中世末には大峪城・安田城の城館遺跡が営まれ、城を取り巻く水堀に引水する必要から城は河川に沿って築かれた。のことから、城に面する流路は中世末の主流路であったことがわかる。

遺跡地は、標高 25m～75m の呂羽丘陵頂上部分水嶺から南西側斜面にかけて立地し、また一部北東側斜面にかかる部分も含む。今回測量調査を行った地点は、遺跡東半にあたる頂上部から南東側斜面にかけても部分であり、標高 40m～72m の位置である。頂上付近平坦面における表層は黒色腐植土である。斜面部や下部平坦面の表層は黄色火山灰質層である。

(2) 歴史的環境

呂羽丘陵頂上部は狭小な帶状地形が続き、遺跡利用としては多くはない。縄文時代には 593 茶屋町山ノ下遺跡が丘陵頂部付近の高位段丘面に営まれる。小規模な集落と推定される。同様の立地には古墳時代前期とみられる 594 北代西山Ⅲ遺跡がある。この遺跡では土器が採集されているが、小規模な集落か古墳であるかは不明である。遺跡の北東約 500m の尾根頂部には弥生末から古墳前期の墳墓群 180 「杉坂古墳群」が営まれる〔古川 1999〕。この古墳群の背景となった生産集落の存在は、台地北側に広がる沖積低地の上に八町Ⅱ遺跡〔富山市教委 2008〕等が確認できる。また本遺跡の東方傾斜地中の小平坦面上には 180 遺跡が存在し、古墳前期の土器が出土している。これも北代西山Ⅲ遺跡同様、集落か墳墓かは不明である。

丘陵西側緩斜面地には、その地形の特性を利用して、旧石器時代から近世まで各時代の遺跡が営まれている。その数も多く、この一帯は富山市でもっとも遺跡密度の高い地域のひとつである。国史跡北代遺跡は旧石器時代から古代の中核的集落遺跡で、特に縄文時代中期には推定 200 棟に及ぶ

大規模集落が形成された。北代遺跡では発掘調査の成果に基づき土屋根竪穴住居群が復元され、注目されている〔富山市教委 1999〕。この長岡台地の北部には、縄文晩期を主体とする長岡八町遺跡がある。平成 15 年の発掘調査では後期から晩期の谷部廐窓遺構から多量の縄文土器・石器が出土し、北陸最大級とみられる土偶頭部が出土した〔富山市教委 2003a〕。特に奈良・平安時代には、長岡台地の各地と長岡台地北側沖積地において、多くの集落遺跡が出現する。この一帯は奈良時代射水郡に属する寒江郷の候補地であり、沖積地や谷底平野において水田耕作、台地上に集落經營が行われたとする見解も提起されている〔富山市教委 1989〕。平安時代前期 9 世紀後半には再び台地上の遺跡数の増



図 3 茶屋町東遺跡と周辺の遺跡(1:20,000)

(番号は市遺跡番号 201 以下の下 3 衔番号)

加が認められ、同様に第二波の開墾が想定される。茶屋町西山遺跡では、10世紀代とみられる製鉄炉・炭窯が確認されている〔富山市教委 2003b〕。それまで射水丘陵や呉羽丘陵南部における鉄生産が、平安前期以降呉羽丘陵北部へ移行していくものと考えられる。

中世末には呉羽山最高峰城山山頂に白鳥城跡が築城された〔富山市教委 1981・1983・1984〕。これらは主に天正 13 (1585) 年農臣秀吉が家臣である富山城主佐々成政攻めを行う際拠点とした時期の遺構と推定したものである。空堀跡においては数回にわたる改修痕が確認されており、それ以前に居城したと記録に見える神保氏時代の遺構を含む可能性がある。この時、安田城・大峪城の二つの出城が築かれ、前田利家臣が防衛に当たったとされている。史料ではこのほかに安養坊に利家が拠ったとする記述もあり、白鳥城以北に存在する山稜のどこか、安養坊付近に砦を構えた可能性がある。

江戸前期には、安養坊山で富山藩時鐘が鋳造された。初代富山藩主前田利次は、寛文 11 (1671) 年富山藩最初の鐘を鋳造した。二代正甫は、貞享 3 (1686) 年加賀藩抱銘物師釜屋彦九郎に三代目の時鐘を行った。このとき大商人吉野屋慶寿が提供した金銀を混入したという。その後元禄 4 (1691) 年に五代目の時鐘を安養坊山で鋳造した〔古川 2005〕。この安養坊山の鋳造地については、詳細な位置は判明していない。

3 遺構 (図 4・5)

尾根上に平坦面 5 面 (A～E 郭) と空堀 1 箇所を確認した。

A郭 旧富山市天文台の所在した場所である。5 郭中、最高所に位置する。北西から南東方向に長い平坦面で、長辺 37m、幅 12m の台形状である。南側の広い 25m × 12m の範囲はほぼ平坦で、その北側の通路部分 12m は、北東の B 郭に向かって低くなってしまい、郭端としている部分と南側平坦面との比高差は約 1.5m である。平坦面中央部は周囲より 40cm 程度高くなっているが、これは天文台撤去の影響とみられる。南東辺の崖側は急崖である。

B郭 A 郭の北東側に位置し、A 郭北東端から 10m 離れる。東西に長い舌状形で、長さ 15m 幅 6m、西端は山道の盛土があり、全形狀規模は不明である。平坦面はほぼ平坦である。A 郭平坦面との比高差は約 2m である。B 郭の北東南の三方は急崖である。B 郭の北側に空堀が東西方向に掘られる。

C郭 B 郭の東側直下に所在する。長さ 6.5m 幅 13m の半円形状の平坦面である。主軸は南東方向である。B 郭との比高差は約 5.6m である。

D郭 A～C 郭とやや離れ、C 郭の南東約 60m に位置する。南北に長い平坦面で、長さ 12m 幅 6.5m の長方形状である。東側は急崖である。B 郭との比高差は約 15.5m である。この平坦面から連続して北側に向かい、幅 3m 延長 29m の通路が存在する。確認できた北端と平坦面比高差は約 1.2m である。この通路はまだ北へ続いているとみられるが開墾が消失している。その方向は C 郭北側へ廻るようである。

E郭 からはその南東側にある E 郭に向かい、北側同様の通路が存在する。この通路上の D 郭寄りの地表面において、戰



図 4 郭群・空堀位置図

国期の土師器皿 1 点を採集した。

E 郭 D 郭の南東側下位に所在する。D 郭とは約 10m 離れており、その間は幅 1.2~3m の通路でつながれている。E 郭の平坦面は長方形状で、長さ 7m 幅 5m である。主軸は南東方向である。D 郭と

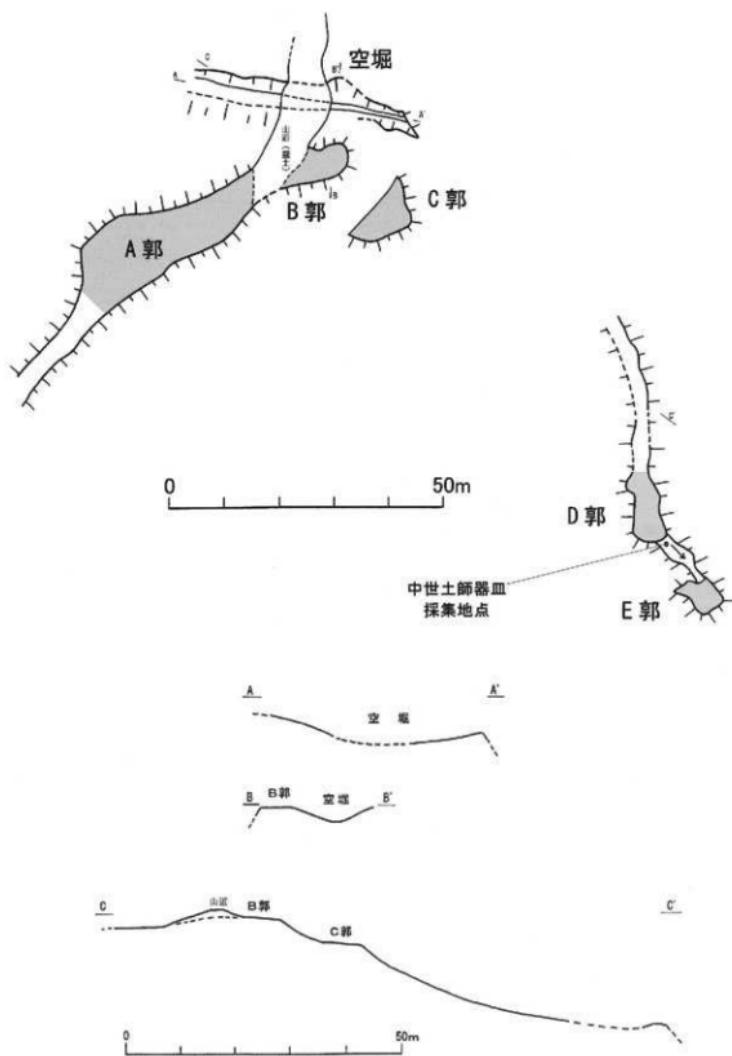


図 5 郭・空堀遺構平面図

は平坦面比高差は約5mである。北東側は急崖である。先端の南東側も傾斜がやや大きい。空堀 B郭北側に設けられた空堀で、尾根を切断するように、尾根筋に直交して設けられている。東端はC郭北側まで確認され、大きな谷の傾斜地へ続く。西端はA郭北側まで確認され、それ以西は自然地形と思われる浅い谷になる。中央は厚い盛り土があり山道となっている。

人工的な掘り込み部分から堀底までの最大高さは1.85m、B郭北端と堀底との比高差は2.5m、A郭北端と堀底との比高差は1.65mである。堀底の西端と東端との比高差は約2.9mであるが、山道直下付近が最も浅く、そこから東に向かって20mで約4.9m下がり、西に向かっては15mで約2m下がり、全体的に山なりの縦断面となる。

3 遺物（図6）

D郭東側において中世土師器片1点を採集した。

にぶい黄橙色を呈する皿で、口唇部は欠失している。口縁復元径は約12.2cm、器高復元1.4cmである。胎土は緻密で砂粒を少し含む。口縁は外傾し、口縁には強くナデておらず、段差がある。

器形は白鳥城跡出土皿と類似し、16世紀後半のものとみられる。

また、E郭より東側の1段下がった斜面部で、

須恵器壊片を確認した。採集地は急斜面で、住宅建設のため土砂採取が行われたため、原状は大きく失われている。このため須恵器の出土した遺構の種別は不明である。次章に遺物報告を行う。なおこの採集地点については、現在埋蔵文化財包蔵地に含めていない。

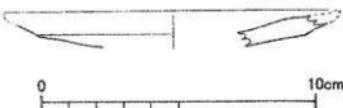


図6 中世土師器実測図

4 総括

(1) 遺跡の性格

茶屋町東遺跡のうち、今回測量調査を行った丘陵頂部から南東斜面にかけての小平坦面群5面及び空堀は、D郭付近で採集された中世土師器の存在とあわせて考えると、戦国末における山城を構成する曲輪・空堀と考えることができる。

調査範囲内では、山頂部において旧天文台の構造物・山道の整地（築上・切上）・その他の公園整備・植林造成等が行われており、かなり現状の改変が認められる。このような状況で、今回確認した小平坦面群がIH状をどこまでとどめているかについて復元的な考察には至っていないが、ある程度の規模が把握できたとみておく。

各曲輪の規模については、山頂部のA郭がもっとも広く350m²、B郭50m²以上、C郭70m²、D郭50m²、E郭40m²となり、低い位置ほど平坦面の面積が狭小となる。D・E郭は規模形状からみて、郭とするより通路上に設けられた整地部分とした方が妥当かもしれない。

空堀は、これらの郭群の北端に位置し、最も高い尾根を断ち切るように配置されている。この空堀の北側には石碑等の立つ平坦面が存在し、この面はA郭よりさらに高い位置に存在するが、そこには平坦面の遺構の存在が認識されない。したがってこの空堀は、郭群の北端の境界を示す性格のものと考えることができよう。

以上のことから、これらの遺構は一体性を持った山城、規模としては小さいため、いわゆる砦跡としての性格を考えることができる。その構築時期は、採集された土師器皿の年代、すなわち16世紀後半の戦国末と推定される。

(2) 戦国末砦跡の具体像

ここで確認された戦国末の砦跡について、具体的な史料との比較により、その性格を明らかにする試みを行いたい。

この砦跡の所在する一帯は、広義の吳羽丘陵のうち、吳羽山を最高峰とする北側の丘陵「吳羽山丘

陵」の南部である。呉羽山丘陵の南側にある城山を最高峰とする丘陵は城山丘陵とも呼ばれる。この二つの丘陵の境界は、現在の県道富山高岡線が丘陵を横断する深い谷地で、ここはかつて「紅葉谷」と呼ばれた〔小柴 1913〕。現在工事で切り通しができたことにより、その谷の存在はよくわからなくなっているが、明治 44 年作成地形図（迅速図）によれば茶屋峠の北方に大きな谷が存在しているのがわかる（図 7）。

さて、この呉羽山・城山一帯は、歴史的環境の項で述べたように、天正 13（1585）年関白秀吉が富山城に拠る越中国守佐々成政を攻める際の拠点となった城郭群が存在するエリアである。その主城が最高峰城山に築かれていた白鳥城跡であり、その出城として大峪城・安田城が築かれたと伝えている。

秀吉の越中出陣に関する具体的な内容は、萩原大輔氏による論考に詳しい〔萩原 2010b〕。これによれば、総勢 7 万人余りの秀吉軍が編成され、先遣隊として 57,300 人が 8 月 4 日出陣した。先遣隊の一一番手は加賀の前田利家で、1 万人を従えている。その他 2 番手丹羽長重から 5 番手まで 38,300 人がいた。利家は 8 月 19 日越中加賀国境津幡に集結させ、佐々に対する総攻撃を開始した。佐々方の木舟城・守山城・増山城を陥落させ、立山・劍岳山麓も放火し、富山城を包囲した。この 26 日に佐々成政は織田信雄を通じ、俱利伽羅峠にいた秀吉に降伏を申し入れ、受け入れられた。その後の動向について、萩原氏は別稿において明らかにしている〔萩原 2010a〕。これによれば秀吉は、翌間 8 月 1 日富山城に入り、越後上杉景勝との会見を予定したが、景勝が出仕しなかったため、4 日に富山城を出て「呉服山」に入り、5 日に富山城の破却を命じ、6 日に呉服山を出て帰京した。

以上の過程において、佐々成政攻めは、富山城以外の越中國内佐々拠点攻めという形で行われており、8 月 26 日以前において呉羽丘陵における城郭整備についての具体的史料は見えない。それが現れるのは、萩原氏が示すように、間 8 月 4 日に「外山城西フサク山」に移った記事である。萩原氏はこの「フサク山」を呉服山と推定している〔萩原 2010a〕。これ以前の富山城に入城した間 8 月 1 日には「國中諸城ニ物主相付」け、戦後処理の段取りを行っている。したがって、陥落した佐々側の城館は、8 月 1 日までに豊臣側の支配下に置かれたことがわかり、それ以後前田氏の支配下となってから実質的な改修等に着手したことがわかる。その意味で、『越後三州志』等が記すように、呉服山（白鳥城）には当初先陣の利家が拠っていたが、秀吉が本陣を構えたとき、家臣片山伊賀・岡崎一吉にそれぞれ大峪城・安田城を築いて移させている。これまでそれは佐々攻め直前のこととされてきたが、

上記の経過を踏まえれば、秀吉が白鳥城に本陣を構えたのは間 8 月 4 日から 6 日までの間であり、佐々が降つてから以後のことになる。大峪城・安田城はこれまでこの佐々攻めの際に築かれたと大方理解されてきたが、ここで佐々攻め以降に築かれた可能性が浮上したことで、その築城時期を見直す必要が生じてきたと言える。



図 7 明治 44 年迅速図

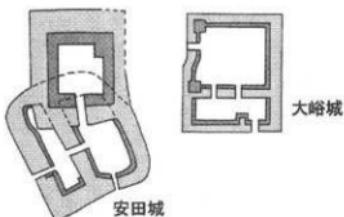


図 8 安田城・大峪城の縄張

筆者は、安田城において網張り構造の異質性から、この城が戦国後期に築城され、天正 13 年前田方が本丸を改修した城郭との見方を示した〔古川 2007〕。これは木舟城に代表されるように〔福岡町教委 2002〕、不整形曲輪による 2 郡構造となる戦国期国人層の城郭と同じ構造であり、その意図にならぬ方形曲輪（聚楽第型）をそれに追加し変形させているといった視点からの推察であった（図 8）。

先にみたように、利家家臣の人峪城・安田城への配属は、閏 8 月 1 日の「國中諸城ニ物主相付」に相当する行為であり、それ以後において両城の改修が行われたといえる。このとき利長は秀吉の最新の聚楽第型城郭築城の基本構造を熟知していたとみられ、その考え方を 2 城に反映させたと考えられる。安田城にあっては方形本丸の追加、大峪城は不明であるが大規模な改修が行われたと考えられる。これは翻って、この 2 城は、佐々攻めの天正 13 年 8 月以前にすでに城郭が存在していたことを示し、またそれらは佐々支配下の城として存在していたことを意味すると思われる。白鳥城では天正 6 年神保氏の居城となっており、天正 9 年以降佐々がこれを継承したことは、増山城など神保氏城館が天正 13 年段階において佐々支配下にあったことから、容易に推察できる。大峪城・安田城はその確証がないが、白鳥城直下にあり大河川に面して防御性が強くみられることから、白鳥城との関連はきわめて緊密なものといえる。當川城との距離が比較的近接していること、また富山城の西側に存在するという位置関係からみて、東の上杉勢力に備えた詰城を白鳥城と位置付け、大峪城・安田城はその前線を守る支城として存在していたことが推定される。

さて、多くの二次史料によれば、佐々攻めにおいて、先遣隊の前田利家らが陣を張ったとする者が、白鳥城・大峪城・安田城以外に存在するとしている。その名称は様々であるが、おおよそ現在地名である「安養坊」に比定できそうであるので、これを「安養坊砦」と呼称することとした。以下、各史料に現れる白鳥城跡・安養坊砦の 2 つについて、記録の中でどのように呼称しているかをまとめたのが表 1 である。山典は省略した。

表 1 史料・二次史料にみる白鳥城・安養坊砦の呼称比較

史料名	安養坊砦	白鳥城
永禄五年上杉輝虎書状		吳福山
元亀二年三木寺定長書状		五福山
(天正 13 年) 閏八月四日有馬則頼完羽柴秀吉書状		フサク山
天正十四年五月上杉景勝御上洛日記帳		五福山
慶長四年安島寺右衛門體銘文		五福山
越中国絵図(南柴文庫) 慶長 10 年頃?		五福山ノ占城
四万石大用水絵図(17 世紀後半)		城山 * 吳福山は城山の南に記載
從加州金沢至江戸道中図(江)中期		吳服山
前田利家記	定寧坊坂	
七国史	安寧坊坂	吳服山
越登賀二州志故墟考	吳服山陣趾 (吳服北代山・安養坊山・道心山)	吳服山陣城・吳服山堡(白鳥峯)
桑華宇苑	あんやうぼう坂	御福山
陳善錄		御ふく山
國祖遺言		五ふく山
北陸七国志 卷第十四	安寧坊坂(アンネイハウザカ)	吳服山(ゴーフヤマ)
末森記	安養坊坂	吳服山
越中志微	安養坊坂陣趾	安養坊山陣址
肯構景達錄	安寧坊坂 安養坊山・道心山	吳服山
加越能二州地理志稿	吳服山壘 (御福山・北代・安養坊・道心山)	白鳥壘(金屋砦・吳服陣城)
越中古跡粗記(加越能文庫)		吳服山城
越中山事記	五福山(安養坊山・安寧坊)	しら鳥古城 安養坊山
越中遊覽誌	安養坊山(吳服山)	吳服山(安養坊)

白鳥城が所在する城山は、平安後期には「御福山」と称されていた。それ以後中世から近世においては基本的に「ゴフクヤマ」と表音呼称され、ゴフクには「御福」・「奥服」・「五福」の文字が当てられたようである。天正 13 年秀吉の越中侵攻の際の「閏八月四日有馬則頓宛羽柴秀吉書状」には「フサク山」とある。「ゴフク」とは通じがたいが、現在のところ萩原氏のいうようにゴフク山のことであろう。現在の遺跡名となっている「白鳥」城の名称を記すものは少なく、江戸期以降にのみ見られる。白鳥峯・白鳥畠野ほか、金屋砦とも称される。したがって「白鳥」ほかの名称は近世以降の廢城後に付けられた別称であり、築城期間における同時代の名称ではなかったと考えられる。

安養坊砦の名称については、近世初期までは見当たらない。成立が 18 世紀代以前となる『桑華宇苑』『宋記』においては「あんやうぼう坂」「安養坊坂」と表記があり、「安養坊坂」の表記が正しいとみられる。それ以後の記述にみられる別名「安寧坊坂」とされる表記は、養を寧と誤記したものと考えられる。この「安養坊坂」の安養坊は、呉羽山直下の安養坊村に由来し、安養坊村領に所在した坂の名称である。安養坊には他に「安養坊山」「道心山」「丸山」などの呼称があり、「鞍見坂」「古坂」の遺称もある。『呉羽山』(小柴 1913) の説明には、丸山には八幡社、道心山には横穴古墓があるとしているので、それぞれ村社八幡社の鎮座する字円明寺山と富山市民俗民芸村東部の番神山横穴墓のある字番神山に比定できる。この道心山と丸山の間を通って山頂「安養坊山」に行く峠道が安養坊坂で、別称鞍見坂・古坂という。古坂の名称は、このルートが元の北陸街道であったことに由来するとしている。なお現在地名では、字道心山は、字番神山の北側、現在の信行寺から西側の斜面地一帯をいい、『呉羽山』の説明とやや異なる。

一方安養坊坂の位置を、茶屋町を通過する北陸街道のうち、東側斜面を通る坂に比定する説もある〔高瀬編 1994〕。これが具体的にどのルートをさすか不明であるが、「大坂」「紅葉坂」が別名であるとしている。紅葉坂は先に見たように峠茶屋を通過しない北側の谷ルート上のことをみられるので、安養坊坂とは一致しない。またこのルートでは五福村領内となってしまい、安養坊の名を冠することは違和感がある。よって、安養坊坂は安養坊領内に所在する坂で、前記鞍見坂・古坂がこれに該当するという小柴説が第 1 に考えられよう。小柴は大正天皇御野立所跡、すなわち最高峰の呉羽山山頂に安養坊砦跡の存在を推定している。

19 世紀まで成立した『加越能三州地理志稿』では、呉服山里の項に詳細な規模を記載している。これによれば「東西二十六間南北十二間星址尚存」「大正十三年秋国祖命築砦于安養坊坂上」とあり、山來規模が判明する。名称は別称も含め 7 つが挙げられており、これには「道心山」も含まれているので、この時期には既に情報が混乱し、括して記述せざるを得なかつたものとみられ、規模が具体的に示されていることから、地点はわかっているが、名称の整理がつかなかつた状態であったと考えられる。この時の情報では、曲輪の規模は東西 47m 余り南北 21m 余りの細長い形状で、土塁跡が 1 か所残るとしている。小柴の推定する呉羽山山頂（野立所跡）は、ほぼ同規模であるが、方位が 45 度ほどずれている。このずれを修正すればここを指している可能性が極めて高いといえる。しかし現状では大正時代に大きく地形変更が行われており、原地形や土塁の存在は確認できない。『呉羽山』には大正期の写真が掲載されているが、現在よりも平坦な地形と盛土がよく見える。なお今回測量した A 郡においては方位が 90 度ずれることと、規模がかなり小さいことで、この A 郡をさすのではないかことは明らかである。

その後の『越登賀三州志』などでは、『加越能三州地理志稿』の情報を援用しつつも、「星」（土塁）が「暫」（空堀）に変化しており、情報が混乱している。

以上により、呉小柴の推定する呉羽山山頂（野立所跡）が安養坊砦跡に比定できるとみられる。

しかし、一方その南側に今回確認した砦跡が存在し、安養坊砦跡と同時代と判断される。これをどう理解するかの問題が残る。

現在地名では、安養坊砦跡推定地である呉羽山山頂は安養坊村領内にあり、今回の砦跡は五福村領内に存在している。江戸時代の『帰農郡五福村・安養坊村・吉作村・住吉村・北代村・小竹村絵図』（富山県立図書館蔵）に示された安養坊村五福村境界は、現在の大字境とほぼ同じであるとみられ、

江戸期においても本砦跡が五福村領内であったことがわかる。これにより、本砦跡が認識されていた場合には、これが「ゴフク」領の山の砦と理解されることになる。先に見たように、「ゴフク山」の城とは城川山頂の白鳥城のことであり、この両城がゴフク山城郭として峻別が混亂し、『越登賀三州志』のよう白鳥城を「呉服山陣城」、安養坊砦を「呉服山陣趾」といった同名異質といった表記発生を招いたのだと考えられる。とすれば、今回測量の砦跡についても、安養坊砦跡の一部に含まれていると考えて差し支えないと思われる。

一方、これらの砦跡の山頂といった立地を考えたとき、ここで推定した呉羽山山頂・今回測量した砦跡範囲以外にも、曲輪が存在する可能性がある場所が存在する。一つは、現県道富山高岡線北側の富山駅前ホテルの建っている高所平坦面である。所在地は富山市呉羽町字滑崩である。小字は崩廻地であることを示唆する。すでに全面改変が行われており、確認は不能である。明治44年地形図によれば少なくとも50m×50mの平坦地が確認され、1947年・1952年米軍撮影空中写真においても同様な平坦面が畑作地として認識できる。また、呉羽山山頂北側はいったん谷状に落ち込むが、そこから尾根続きに約200m北東に行ったところには、150m×30mの細長い平坦面が存在し、桜の広場や旧茶店などとして造成開発が行われており、確認できない。

これらの2か所はいずれも富山城を眼下に見下ろすことのできる地で、前記で述べた呉羽山山頂・今回測量の郭群よりもはるかに広く、多数の将兵を留置させるには絶好の地といえる。しかしながら現況確認ができないため、曲輪候補地にとどめておかざるを得ない。

富山城の佐々成攻攻略のため、秀吉は総計7万人といった大規模な軍を派遣し、前田利長を始めとした先遣隊5万7千余を転戦させ、富山城攻略に成功した。秀吉が富山城に入城した閏8月1日時点での、総勢7万のほとんどは富山に集合したことであろう。同日のうちに支配下に置いた佐々諸城の守将が決定されており、大崎城・安田城は前田利家家臣、その後5日に破却が決定された富山城は、その後利家の管理下となっている。したがって戦後処理のうち富山城と近傍の城郭は、先遣隊の一一番隊として大きく貢献した前田利家に渡されたと理解される。白鳥城にいた前田利家家臣2人がそれぞれ人峪城・安田城に移ったとする『越中史徵』などの記述は、秀吉が富山城から白鳥城へ移ったことに伴うものであるが、このことから白鳥城は利家管理下に置かれていたことがわかる。以上の状況から、伝承にもあるように、これらの諸城と一体と理解できる安養坊砦もまた、前田管理下におさまっていたと考えられる。

さて、安養坊砦の設置時期については、出土した上器皿から16世紀後半と理解したが、天正13年佐々成攻略の以前か以後からの判断は困難である。伝承では前田利長構築としているが、秀吉の富山城入城に際して攻防戦が行われておらず、また秀吉入城以後に新規に築造する必要が生じないことから、佐々支配段階における構築と理解した方がよいと考えられる。それではこの安養坊砦はどのような必要性のもとに築造されたのかを考察する。

砦は、富山城の諸城としての白鳥城同様、高地にあって防御に優れるが、面積が狭小で詰城といった規模ではない。したがって特定の目的のために置かれたと推定される。地理的環境を見ると、砦の南側には北陸街道が通る。戦国末期における北陸街道の経路は、現在のところ明らかではない。江戸期の北陸街道上には、戦国後期に国人寺崎氏の願海寺城が築かれている。これが主要街道を遮断し監視する役割と言った当時の築城意識からみると、この街道が当時の富山城と高岡方面を結ぶ主幹道であったことがわかる。このような前提に立ってこの主幹道を見ると、ほぼ直線的に富山に至っていることに気づく。これを基準に河川・主幹道路情報を整理したものが図9である。

まずIH北陸街道以前の主幹道のルートであるが、願海寺城から東へまっすぐ行き、中茶屋へ至る。近世北陸街道はここから峠茶屋へ至り、現七面堂横を通過してそこから斜面を下って北に折れ、IH称藤子を経由して五福東に折れるルートが想定されている〔富山県教委1980〕。これ以前の旧道は、峠茶屋の北側の谷地、先に推定した紅葉谷（現在の県道富山高岡線）を通過し、山麓に降りた後、6度ほど南へルートを振り、五福町方向へ進む。また中茶屋から西へ進むルートは、正保4年『越中道記』で「大道」のルートとなっており、これは北陸街道本道と理解される。このルートの道幅は2間

(3.64m) である。中茶屋から願海寺城方面の通りについては記載がない。中茶屋から射水市黒河に至る大道のルートについては、律令期の官道に由来する可能性がある。経路上にある黒河集落の黒河尺目遺跡は平安時代の婦負郡家と推定されており [藤田 2000]、郡家を通過する幹道は伝路と考えられることから、この大道は、富山方面に所在する新川郡家へのルートとして機能していたものと考えられる。一方呉羽丘陵の最高峰城山山西側には、呉羽山古道と呼ぶ古代道路跡と推定される道路遺構が存在する [西井・小林 2005]。これは北西方向から城山山頂に向かって延びてくる直線道路で、山頂手前で南に折れ、山頂を迂回するルートで山麓に降り、再びやや角度を変えて直線道路となる。その東方へのルートは不明であるが、富山方面へ向かう可能性がある。

以上の情報から、安養坊砦の位置を再確認すると、願海寺城と山を結ぶ主幹道、後の北陸街道とほぼ似たルートであるが山越えルートが異なるルートのすぐ北側の山に立地していることから、安養坊砦に与えられた役割は、この主幹道の監視であることが想定される。
(古川)

参考文献

- 小柴直矩 1913『呉羽山』
- 佐伯哲也 1998『白鳥城の縄張りから読み取る佐々征伐について』『富山市考古資料館報』第34号
- 佐伯哲也 2007『尾根を断ち切る構造遺構について』『大境』第27号 富山考古学会
- 佐伯哲也 2011『越中中世城郭図面集1』桂書房
- 高岡 徹 1980『富山県』『日本城郭大系』第7巻新潟・富山・石川 新人物往来社
- 高岡 徹 1997『越中中部における戦国史の展開—神保長職から佐々成政まで—』
- 高瀬重雄監修 1994『日本歴史地名大系16 富山県の地名』平凡社
- 富山県編 1978『越中道記』『富山県史 史料編IV 近世中』
- 富山県教育委員会 1980『富山県歴史の道調査報告書 北陸街道』
- 富山県埋蔵文化財センター 2006『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』
- 富山市教育委員会 1976『富山市遺跡地図』
- 富山市教育委員会 1978『富山市呉羽富田町遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1979『北代遺跡試掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1981『白鳥城跡試掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1983『白鳥城跡試掘調査概要(II)』
- 富山市教育委員会 1984『白鳥城跡試掘調査概要(III)』
- 富山市教育委員会 1987『長岡杉林遺跡』
- 五福校下自治振興会編 1991『五福郷上史』
- 富山市教育委員会 1993『富山市遺跡地図(改定版)』
- 富山市教育委員会 1999『史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書』
- 富山市教育委員会 2003a『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2003b『富山市北代西山II遺跡、茶屋町遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008『富山市八町II遺跡発掘調査報告書』



図9 戦国末期以前における呉羽山周辺の城郭と交通環境

- 西井龍儀・小林高範 2005 「奥羽山古道の調査」『大境』第 25 号 富山考古学会
- 萩原大輔 2010a 「天正年間中期の富山坡」『富山史壇』第 161 号 越中史壇会
- 萩原大輔 2010b 「關山秀吉越中山陣に関する基礎的考察」『富山史壇』第 162 号 越中史壇会
- 藤田富士夫 2000 「古代北陸道を復元する」『考古学フォーラム 奈良時代の高岡を語る』資料 高岡市立二上公民館
- 古川知明 1999 「富山市杉坂古墳群」『富山平野の出現期古墳 発表要旨・資料集』富山考古学会
- 古川知明 2004 「富山坡時鐘について」『富山史壇』第 147 号 越中史壇会
- 古川知明 2007 「慶長期富山城内郭の系譜—越中における聚楽第型城郭の成立と展開—」『富山史壇』第 153 号 越中史壇会



写真1 茶屋町東遺跡遠景（南東から）



写真2 A郭（南東から）



写真3 B郭（北から）



写真4 B郭北側の空堀（北東から）



写真5 C郭（南西から）



写真6 D・E郭（北西から）



写真7 D郭（北西から）



写真8 E郭（北西から）



写真9 D郭南側中世土師器出土（南から）



写真10 採集時の中世土師器



写真11 中世土師器



写真12 中世土師器断面



写真 13 1946 年米軍撮影（点線が今回測量地）

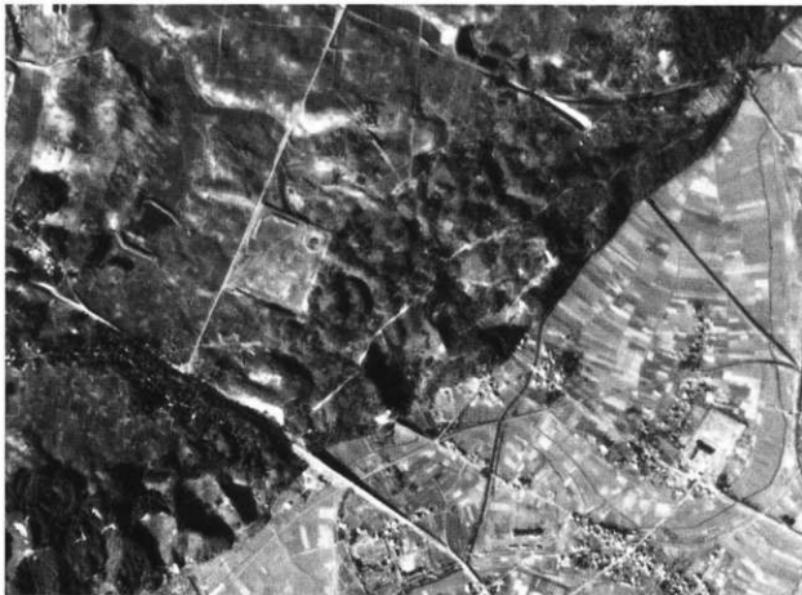


写真 14 1947 年米軍撮影

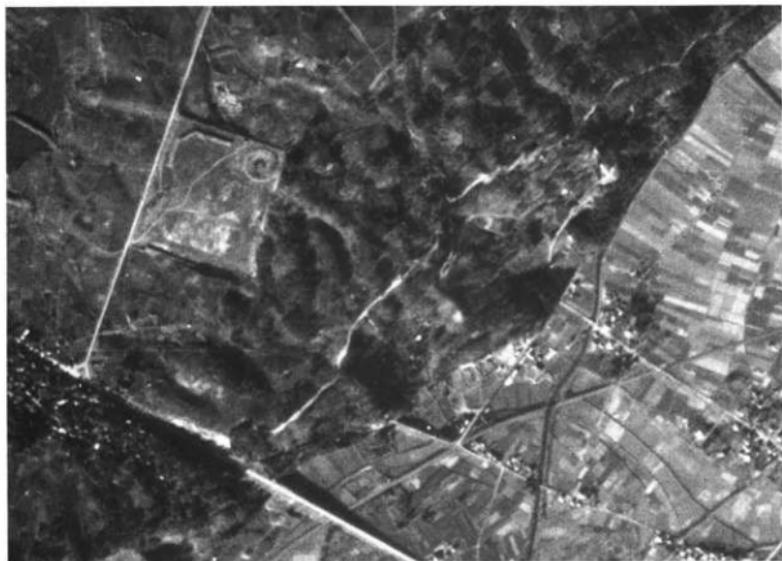


写真 15 1947 年米軍撮影



写真 16 1952 年米軍撮影

IV 茶屋町東遺跡の南方から採集された須恵器

1 概要

採集地のすぐ北側に中世の砦跡とみられる茶屋町東遺跡が存在する。平成22年5月23日に富山市埋蔵文化財センター所長古川らがこの砦跡の踏査を行っていたところ、須恵器5点を採集したものである。

採集地点は、富山市安養坊地内の呉羽丘陵北部の西斜面である。標高約30mに位置し、平地との比高差は約20mである。南東に延びる小尾根の先端にあたり、富山平野の眺望が良い。現状は竹林である。南西側は崩落により崖面を呈する。

東斜面を下った谷状地形内に奈良・平安時代の安養坊遺跡（散布地）があり、安養坊遺跡を挟んだ尾根上に安養坊円山古墳が存在する。さらに、その北東に古墳時代後・終末期の呉羽山古墳、番神山横穴墓がある。呉羽山古墳は昭和4年に不時発見され、両袖式の横穴式石室から金銅裝頭椎大刀等を出土した〔大村 1931〕。番神山横穴墓群は15基以上からなり、昭和3・40・43年に不時発見された。内部から須恵器や鉄刀、耳環などが出土している〔小黒 2005〕。また、採集地点の北側は、上述のように中世の砦跡とされる茶屋町東遺跡がある。

2 採集遺物（第2図）

須恵器5点がある。

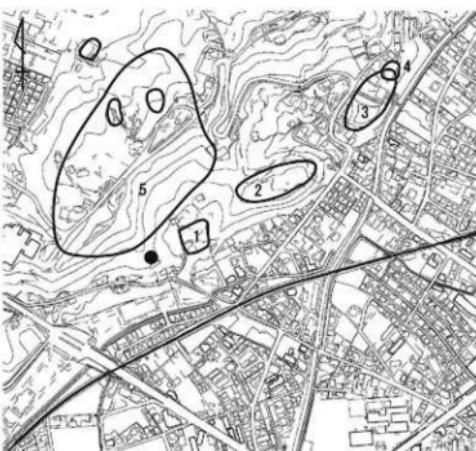
1は壺か甕の頸部と考えられる。櫛描波状文が2条施される。内面の一部に自然釉の付着がある。2～5は甕である。外面はいずれも平行叩き目である。叩き目に直交する木目があり、格子風に見える。3・5は木目が明瞭である。内面は同心円の当て具痕が残るが、2～4はナデによるためか薄く見える程度である。甕は2～4と5に二分できそうである。5は2～4に比べて、外面の叩き目がやや細かく、内面の当て具痕が明瞭に残る。胎土も5の方が緻密である。

時期は古墳時代後・終末期におさまると考えられる。陶邑産ではないとみられるので、周辺の在地窯成立以後の製品といえる。

3 須恵器の由来

採集地点は、現在では明確に墳丘とみられる地形や窯の痕跡は確認できない。そのためどこから来たものか断定はできないが、いくつかの可能性を提示してまとめにかえたい。

まず、採集地点に削平された古墳が存在していた可能性が考えられる。また、周辺から二次的に移動してきた可能性もある。この場合、上方（北側）にある茶屋町東遺跡の範囲に存在していた古墳や窯が、後世の開発で壊され、須恵器が流れてきたとみるのが最も可能性が高い。



●採集地点 1. 安養坊東遺跡 2. 安養坊円山古墳 3. 番神山横穴墓群

4. 呉羽山古墳 5. 茶屋町東遺跡

第1図 採集地点位置図 (1:10,000)

呉羽丘陵には、出現期から終末期にかけて多数の古墳が存在する。とくに採集地点に近い呉羽丘陵北部は、冒頭に記したように後・終末期の呉羽山古墳や番神山横穴墓が築かれている。歴史的な蒸地のある地域であり、本須恵器は当該期における未知の遺跡が存在することを示唆する。

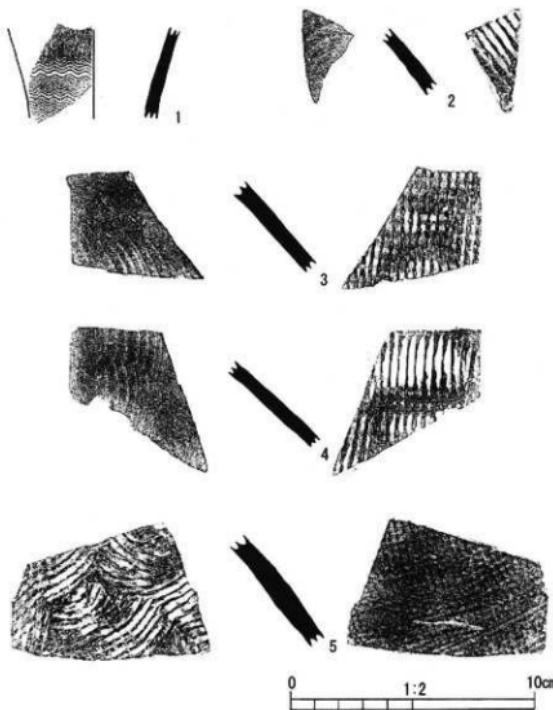
(野垣)

参考文献

大村正之 1931「呉羽山古墳横穴式石室」『宮山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11集 宮山県学務部

小黒智久 2005「番神山横穴墓群」『ふくおかの飛鳥時代を考える』福岡町教育委員会

田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店



第2図 採集遺物



写真1 採集地点付近から富山平野を望む（北から）



写真2 採集地点近景（北西から）



写真3 採集地点近景（南東から）



写真4 遺物散布状況



写真5 遺物散布状況

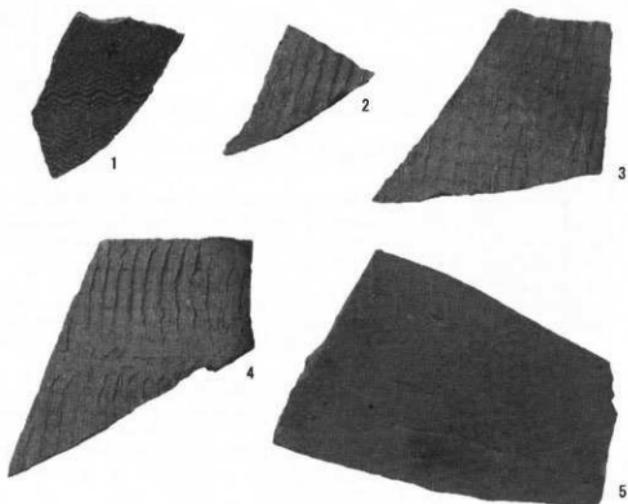


写真6 採集遺物

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせはっくつちょうさがいよう なな
書名	富山市内遺跡発掘調査概要VII
副書名	
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	51
編著者名	古川知明・野垣好史
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
編集機関所在地	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 Tel. 076-442-4246
発行年月日	西暦 2012年3月30日

所収文化財名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金草電化農場前遺跡	富山市市吉	16201	201333	36度42分00秒	137度09分20秒	20020311～20020312	145	個人住宅建築
吳羽富田町遺跡	富山市北代字伊佐波	16201	201160	36度42分50秒	137度10分50秒	20020313～20020314	44	個人住宅建築
茶屋町東遺跡	富山市五穀字人平	16201	201595	36度42分30秒	137度11分00秒	201105	(600)	現況測量調査

所収文化財名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金草電化農場前遺跡	集落跡	縄文	ピット	縄文土器	
	散布地	白鳳		須恵器	白鳳期須恵器は、近接する金草第一古窯跡から供給か。
	集落跡	奈良・平安	土師器焼成坑、土坑	土師器・須恵器・陶製円板	
吳羽富田町遺跡	集落跡	平安	掘立柱建物3棟	土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓	9世紀代
茶屋町東遺跡	岩跡	戦国	曲輪・空堀	土師器	

1 金草電化農場前遺跡

土師器焼成坑を単独で検出した。楕円形状の不整形で浅い構造である。片側壁面付近に焼土・木炭の塊を検出した。形態は、望月精司分類のA類不整形タイプに該当する。出土土器は構築以後の廃棄物で、構築年代は8世紀後半とみられる。焼成材とみられる出土木炭のC14年代測定の結果、7世紀末～8世紀後半の年代が山され、遺構推定年代と一致した。

2 吳羽富田町遺跡

遺跡東部で3棟の掘立柱建物を検出した。側柱建物で、SB01は柱穴が1mに及ぶのが大きい。SB02の柱底部には、黄色粘土を叩いて安定させる造作がなされていた。建物は9世紀代である。昭和52年の発掘調査では遺跡西部で9世紀代の堅穴建物4棟を検出しており、地点により建物構造が異なるか。

3 茶屋町東遺跡

呉羽丘陵北部の山頂部から斜面にかけて5か所の曲輪状平坦面と空堀1か所を検出した。曲輪下部から戰国末～16世紀後半の土師器皿を採集しており、これが構築年代と推定される。関白秀吉が富山城の作戸攻めのため天正13年越中に侵攻した際、佐々成政を降した後、佐々成政に家臣を配置し、白鳥城に拠った。このときに白鳥城・大崎城・安田城を改修整備したとみられる。史料ではこれ以外に丘陵北部に前田利家軍の拠った砦の存在に言及があり、本遺跡はこの砦の一部か、この砦は安達砦と呼称する。

要約

富山市埋蔵文化財調査報告 51

富山市内遺跡発掘調査概要VII

発行日：2012（平成24）年3月30日

発 行：富山市教育委員会

編 集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091

富山市愛宕町1丁目2番24号

T E L : 076-442-4246

F A X : 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷：前田印刷株式会社

